（1）初めての献血のきっかけ「1位＜最も大きな要因＞」（Q22）

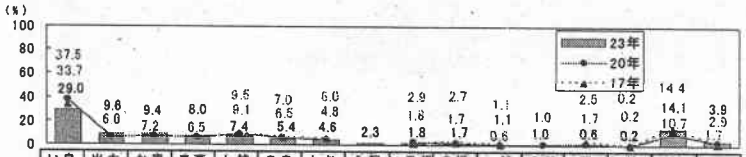
【 初めての献血のきっかけの1位は「自分の血液を役立てたい」が3割弱 】

- 初めての献血のきっかけを大きい順に3つまで選んでもらったところ、1位に挙がった要因では、「自分の血液が役に立ってほしいから」が29.0%で3割弱。その他はそれぞれ1割以下で、「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」(9.6%)、「家族や友人などに勧められたから」(9.4%)、「高校に献血バス・出張献血が来たから」(8.0%)が続く。
- 職業別では、各層とも「自分の血液が役に立ってほしいから」が主要なきっかけである。公務員では他の層と比べて「なんとなく」(19.6%)が高い。
- 性別では、男性で「なんとなく」(16.9%)献血をする割合が女性(11.3%)に比べて高い。
- 地域別では、「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」が北海道(13.6%)、中国・四国(13.5%)、九州・沖縄(12.5%)で他の地域と比べて高い。

- ➢ 過去2回調査と比べると、全体での「自分の血液が役に立ってほしいから」が低下している。職業別・性別・地域別でみても、各層で同様に低下している。
- ➢ 職業別では、高校生と専業主婦は「家族や友人などに勧められたから」が上昇、公務員と自営業では「なんとなく」が上昇している。
- ➢ 地域別では、北海道と中国・四国で「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」が上昇している。

（1）初めての献血のきっかけ「1位＜最も大きな要因＞」（Q22）

Q22. 初めての献血のきっかけになったのは、次のうちどれですか。
きっかけの大きい順に3つまでお選びください。（それぞれひとつずつ）



【基数：対象者全員】 (N)

			自分の血液が役に立ってほしいから	大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから	家族や友人などに勧められたから	高校に献血バス・出張献血が来たから	輸血用の血液が不足していると聞いたから	自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから	お菓子やジュースがもらえるから	記念品やグッズがもらえるから	将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した	過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから	輸血を受けるときに役立てたいから	献血は愛に根ざしたものだから	図書券がもらえたから	ネイルアートやマッサージなどのサービスが受けられるから	なんとなく	覚えていない
全体	23年	(5000)	29.0	9.6	9.4	8.0	7.4	5.4	4.6	2.3	1.8	1.7	1.1	1.0	0.6	0.2	14.1	3.9
	20年	(5000)	37.5	6.6	7.2	6.5	9.1	6.5	4.8		2.9	1.7	0.6	1.0	1.7	0.2	10.7	2.9
	17年	(5000)	33.7				9.5	7.0	6.0		1.8	2.7	1.1		2.5	0.2	14.4	1.7
職業別 高校生	23年	(180)	33.9	1.1	10.6	7.2	4.4	9.4	2.8	2.8	1.7	1.1	1.7	0.6	－	0.6	14.4	7.8
	20年	(181)	44.8	0.6	3.9	8.3	5.5	5.5	7.7		3.3	1.1	1.1	0.6	1.1	－	11.6	5.0
	17年	(87)	31.0				6.9	8.0	10.3		3.4	3.4	1.1		－	－	23.0	－
大学生・専門学校生	23年	(1481)	29.8	13.2	8.1	7.6	6.7	4.9	4.9	2.6	1.5	1.5	0.9	1.4	0.2	0.1	12.4	2.3
	20年	(1453)	37.2	7.2	6.7	6.1	9.1	7.2	6.2		2.1	1.7	0.6	1.0	1.2	0.2	10.5	3.0
	17年	(652)	32.2				10.7	7.4	6.3		0.9	4.8	1.2		1.2	0.3	15.5	1.5
会社員	23年	(2019)	29.3	8.5	9.3	7.1	6.9	5.5	5.2	2.1	2.1	1.6	1.2	1.0	0.6	0.2	15.0	4.4
	20年	(2152)	37.8	6.9	7.3	6.0	9.1	6.7	3.9		3.0	1.7	0.6	1.1	1.8	0.1	11.1	3.0
	17年	(2099)	34.2				9.5	6.7	5.4		1.9	3.0	0.9		3.0	0.2	14.6	1.8
公務員	23年	(225)	25.3	6.2	11.1	8.9	6.2	5.3	4.0	3.1	2.2	3.6	0.9	0.4	0.4	－	19.6	2.7
	20年	(207)	36.2	5.8	7.2	7.7	9.7	4.3	2.9		4.3	1.4	1.0	3.9	2.9	－	10.1	2.4
	17年	(203)	35.5				10.3	11.3	3.4		3.0	2.0	1.0		2.0	－	12.3	1.5
自営業	23年	(135)	23.7	12.6	5.2	7.4	7.4	5.2	5.9	1.5	3.7	0.7	1.5	2.2	－	0.7	16.3	5.9
	20年	(106)	42.5	3.8	6.6	9.4	5.7	5.7	4.7		3.8	3.8	－	0.9	1.9	－	7.5	3.8
	17年	(143)	28.7				11.9	8.4	6.3		2.8	2.8	1.4		2.1	－	13.3	3.5
専業主婦	23年	(444)	28.2	6.5	12.6	12.4	7.7	4.1	4.5	2.0	1.4	2.7	1.1	0.5	0.9	0.2	11.7	3.6
	20年	(448)	42.9	6.0	7.1	5.6	12.1	5.4	3.3		4.5	1.8	0.2	0.7	2.0	0.4	7.6	0.7
	17年	(1067)	35.1				8.3	6.1	6.8		1.9	1.7	1.2		2.3	－	12.7	1.6
その他	23年	(518)	27.3	9.3	11.2	9.1	6.6	6.4	2.5	1.7	1.6	1.4	0.8	0.4	1.4	0.2	14.9	5.2
	20年	(453)	29.4	7.1	9.9	9.3	8.6	6.0	5.5		2.0	1.8	0.9	0.4	2.6	0.4	13.2	2.9
	17年	(749)	32.6				9.6	7.5	6.0		1.7	1.7	1.2		2.8	0.3	15.1	1.6
性別 男性	23年	(2518)	27.0	11.1	7.4	7.4	6.7	5.4	4.3	2.3	1.7	1.5	1.1	1.4	0.6	0.1	16.9	5.1
	20年	(2556)	36.4	7.3	6.3	6.3	7.8	7.0	4.1		2.7	1.7	0.7	1.3	1.8	0.1	12.7	3.6
	17年	(1705)	32.6				9.9	7.9	5.5		2.1	2.8	1.4		2.9	0.1	16.8	2.2
女性	23年	(2482)	31.0	8.0	11.5	8.6	8.1	5.4	5.0	2.2	1.9	1.9	1.0	0.6	0.5	0.3	11.3	2.7
	20年	(2444)	38.8	5.8	8.1	6.8	10.5	6.0	5.5		3.0	1.7	0.5	0.7	1.6	0.3	8.6	2.1
	17年	(3295)	34.3				9.3	6.6	6.2		1.7	2.7	0.9		2.2	0.2	13.2	1.4
地域別 北海道	23年	(206)	28.6	13.6	8.3	5.3	8.3	4.9	4.4	0.5	1.0	2.9	1.5	－	0.5	－	15.5	4.9
	20年	(210)	31.0	8.1	6.7	4.8	9.5	7.1	9.0		2.9	1.9	1.4	－	1.0	－	14.3	2.4
	17年	(200)	40.0				7.5	5.5	6.5		1.0	4.5	1.5		1.0	－	12.5	1.5
東北	23年	(351)	25.2	6.2	12.2	11.3	6.5	5.1	4.5	4.2	1.7	1.1	0.6	1.1	0.6	0.3	15.6	3.7
	20年	(355)	36.1	3.9	6.8	9.6	9.3	8.7	3.7		2.3	2.0	1.4	0.8	2.0	－	11.0	2.5
	17年	(350)	33.4				9.7	7.7	8.0		2.3	1.4	0.6		1.4	－	10.9	1.7
関東甲信越	23年	(1825)	27.6	8.5	8.4	10.0	7.0	5.7	6.0	2.4	2.1	1.5	1.0	1.4	0.7	0.4	12.9	4.5
	20年	(1825)	38.8	5.2	6.8	6.1	8.9	6.5	5.8		2.8	1.4	0.4	1.2	1.7	0.3	11.1	3.2
	17年	(1800)	31.9				8.9	6.2	7.3		1.9	2.8	1.0		3.0	0.4	14.9	2.1
東海北陸	23年	(786)	32.1	8.4	10.4	7.4	6.2	4.3	4.8	2.7	2.7	1.5	0.9	0.5	0.3	－	14.5	3.3
	20年	(780)	37.9	6.5	7.6	8.1	8.8	5.4	4.4		3.1	2.4	0.8	0.8	2.7	0.1	8.8	2.8
	17年	(750)	35.9				8.4	7.1	4.8		2.3	3.2	1.2		3.1	－	15.1	1.5
近畿	23年	(816)	30.5	9.2	9.7	5.1	8.5	5.8	3.3	1.7	1.5	2.2	1.3	0.9	0.5	0.1	16.5	3.2
	20年	(816)	38.4	8.1	6.7	4.3	9.3	8.4	4.3		2.9	1.7	0.5	1.0	0.9	0.2	12.4	2.8
	17年	(850)	36.0				10.6	8.8	3.8		1.1	2.6	1.1		1.6	0.1	14.9	1.8
中国・四国	23年	(431)	29.2	13.5	9.5	6.7	8.1	6.0	2.6	1.9	1.4	1.9	0.9	0.9	0.9	－	13.2	3.2
	20年	(431)	38.3	6.7	8.1	6.7	9.3	7.0	3.5		3.2	1.4	0.2	1.2	1.9	0.5	9.5	2.6
	17年	(450)	34.2				12.0	7.3	4.4		1.8	2.2	0.7		2.2	－	16.4	1.3
九州・沖縄	23年	(583)	29.5	12.5	9.6	6.3	8.2	5.5	3.8	1.9	1.0	1.7	1.2	0.9	0.5	0.2	13.4	3.8
	20年	(583)	34.8	9.9	8.6	7.4	9.6	6.3	3.1		2.7	1.7	0.7	1.4	1.9	－	9.3	2.6
	17年	(600)	31.0				9.7	6.7	6.2		2.2	2.7	1.5		2.5	－	12.3	0.8

注：17年は「献血は愛に根ざしたものだから」「家族や友人などに勧められたから」「高校に献血バス・出張献血が来たから」「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」の回答肢なし。逆に20年は「高校での集団献血、若しくは友人に誘われたから」を削除。
17年、20年は「記念品やグッズがもらえるから」の回答肢なし。

（2）初めての献血のきっかけ「1位～3位累計」（Q22）

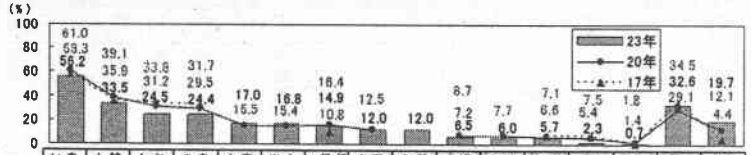
【 初めての献血のきっかけ(累計)は「自分の血液を役立てたい」が6割弱 】

- 初めての献血のきっかけとなったものを1～3位の累計でみると、「自分の血液が役に立ってほしいから」が圧倒的に高く56.2%。次いで、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(33.5%)、「お菓子やジュースがもらえるから」(24.5%)、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」(24.4%)が続く。
- 職業別では、各層で「自分の血液が役に立ってほしいから」がトップの理由となっている。高校生では「献血は愛に根ざしたものだから」(14.4%)が他の層と比べて高い。また、専業主婦で「家族や友人などに勧められたから」が22.7%で他の層と比べて高い。
- 性別では、男性に比べて女性で「自分の血液が役に立ってほしいから」(60.2%)、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(36.2%)、「お菓子やジュースがもらえるから」(27.7%)、「家族や友人などに勧められたから」(20.4%)が高く、対して男性は女性に比べて「なんとなく」(35.3%)献血している人が多い。
- 地域別では、「高校に献血バス・出張献血が来たから」が東北(19.0%)で他の地域と比べて高い。

- ➢ 20年度調査と比べると、全体では「輸血用の血液が不足していると聞いたから」、「お菓子やジュースがもらえるから」「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」といった上位2～4位のきっかけが低下している。
- ➢ 職業別では、20年度調査と比べると「自分の血液が役に立ってほしいから」「輸血用の血液が不足していると聞いたから」「お菓子やジュースがもらえるから」といった上位1～3位の意見が総じて各層で低下している。一方、公務員、自営業、専業主婦では「なんとなく」が上昇している。
- ➢ 性別・地域別では、各層で総じて上位1～4位のきっかけが20年度調査と比べて低下している。東北では「家族や友人などに勧められたから」や「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」といった外的要因がきっかけになった割合が20年度調査と比べて上昇した。

（2）初めての献血のきっかけ「1位～3位累計」（Q22）

Q22. 初めての献血のきっかけになったのは、次のうちどれですか。
きっかけの大きい順に3つまでお選びください。（それぞれひとつずつ）



【基数:対象者全員】 (%)

		(N)	自分の血液が役に立ってほしいから	輸血用の血液が不足していると聞いたから	お菓子やジュースがもらえるから	自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから	家族や友人などに勧められたから	大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから	何度か自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した	高校に献血バス・出張献血が来たから	記念品やグッズがもらえるから	過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから	献血は愛に根ざしたものだから	輸血を受けるときに役立てたいから	図書券がもらえたから	ネイルアートやマッサージなどのサービスが受けられるから	なんとなく	覚えていない
全体	23年	(5000)	56.2	33.5	24.5	24.4	17.0	16.8	14.9	12.0	12.0	6.5	6.0	5.7	2.3	0.7	32.6	19.7
	20年	(5000)	61.0	39.1	31.2	29.5	15.5	15.4	16.4	12.5		7.2	7.7	6.6	5.4	1.8	29.1	12.1
	17年	(5000)	58.3	35.9	33.8	31.7			10.8			8.7		7.1	7.5	1.4	34.5	4.4
職業別 高校生	23年	(180)	53.3	36.7	22.2	23.3	15.0	2.8	15.0	11.7	12.2	10.0	14.4	7.2	1.1	1.7	26.1	22.2
	20年	(181)	62.4	39.2	33.1	22.7	12.2	0.6	11.6	16.6		11.6	14.4	12.2	3.9	5.0	27.6	13.3
	17年	(87)	49.4	34.5	44.8	29.9			6.9			10.3		10.3	5.7	3.4	43.7	6.9
職業別 大学生・専門学校生	23年	(1481)	56.5	36.5	27.5	22.9	16.3	23.9	15.0	12.5	13.8	6.1	6.4	5.8	2.0	0.5	29.8	14.2
	20年	(1453)	58.6	38.5	33.6	31.9	15.5	21.1	15.3	12.8		7.1	7.2	7.1	4.6	1.3	27.5	8.8
	17年	(652)	58.7	36.0	34.2	31.9			9.0			12.1		7.7	6.4	2.0	36.2	3.2
職業別 会社員	23年	(2019)	55.4	32.2	22.5	25.9	16.0	14.7	14.7	10.3	11.0	6.7	6.3	6.0	2.7	0.7	33.3	23.4
	20年	(2152)	61.3	38.3	29.3	28.7	14.9	14.0	17.3	11.6		8.8	7.9	6.4	6.2	1.6	30.7	14.0
	17年	(2099)	57.5	36.8	32.7	31.4			11.9			8.6		7.0	8.1	1.4	34.9	5.1
職業別 公務員	23年	(225)	57.3	28.0	22.2	21.8	18.2	12.0	15.6	13.8	15.6	7.6	5.3	4.9	2.2	1.3	39.1	22.7
	20年	(207)	61.8	39.1	30.0	30.9	17.4	12.6	19.8	12.6		9.2	9.2	5.3	7.2	2.4	30.0	6.3
	17年	(203)	63.1	39.4	34.5	38.4			13.8			6.9		5.9	11.8	3.0	29.6	0.5
職業別 自営業	23年	(135)	50.4	30.4	25.9	22.2	11.1	16.3	20.7	11.9	9.6	2.2	5.9	4.4	2.2	3.0	34.8	25.2
	20年	(106)	65.1	43.4	27.4	27.4	16.0	5.7	16.0	15.1		5.7	15.1	1.9	6.6	4.7	25.5	12.3
	17年	(143)	55.2	34.3	32.9	27.3			11.9			13.3		7.7	9.1	0.7	31.5	4.9
職業別 専業主婦	23年	(444)	60.6	33.6	26.4	25.0	22.7	11.0	14.0	14.6	11.3	7.2	3.4	5.0	2.5	0.5	31.3	18.5
	20年	(448)	69.4	45.8	30.6	28.8	17.2	12.5	19.8	11.8		7.8	8.0	6.5	4.2	1.3	25.4	7.4
	17年	(1067)	61.3	35.1	34.3	31.1			11.7			7.4		7.1	6.3	0.7	30.9	4.6
職業別 その他	23年	(616)	56.6	32.2	23.3	24.8	19.8	16.9	14.3	14.1	9.9	5.8	3.3	4.8	1.9	0.4	38.2	18.2
	20年	(453)	58.7	37.3	34.0	29.4	17.0	15.9	12.4	14.6		6.2	3.3	5.5	4.9	3.1	30.7	16.8
	17年	(749)	56.2	33.8	34.3	32.0			7.7			6.5		7.1	7.3	1.1	37.8	3.7
性別 男性	23年	(2518)	52.3	30.9	21.8	23.9	13.7	19.5	14.7	11.0	12.0	6.2	7.1	6.4	2.5	0.6	35.3	23.4
	20年	(2556)	57.9	35.0	28.8	28.9	13.9	16.5	16.2	11.9		6.9	9.2	7.5	5.9	1.5	33.3	14.3
	17年	(1705)	54.8	34.7	29.5	31.6			11.1			8.4		9.1	8.7	1.4	38.9	5.6
性別 女性	23年	(2482)	60.2	36.2	27.7	25.0	20.4	14.1	15.1	13.0	11.9	6.8	4.9	5.0	2.1	0.8	29.9	15.9
	20年	(2444)	64.2	43.4	33.8	30.2	17.1	14.2	16.0	13.2		7.4	6.2	5.6	4.9	2.2	24.6	9.8
	17年	(3295)	60.1	38.5	38.0	31.7			10.7			8.8		6.1	6.9	1.4	32.2	3.7
地域別 北海道	23年	(206)	56.8	33.5	27.7	21.6	17.5	19.4	12.1	9.7	8.3	10.2	3.9	4.9	2.4	0.5	32.0	21.4
	20年	(210)	60.0	37.1	34.3	30.5	17.6	15.2	13.3	9.0		8.6	6.2	7.6	5.2	0.5	33.8	12.4
	17年	(200)	63.5	41.5	39.0	30.0			9.5			11.5		8.0	5.5	2.0	34.0	4.5
地域別 東北	23年	(353)	48.4	29.5	28.0	21.5	21.8	14.7	11.9	19.0	14.7	4.2	3.1	3.7	2.8	1.1	36.3	21.8
	20年	(355)	60.8	38.3	31.3	29.6	13.8	9.6	14.6	18.9		9.6	6.2	6.8	5.9	1.7	32.4	10.7
	17年	(350)	64.0	32.3	30.3	32.0			13.7			8.0		6.3	7.4	0.9	29.1	4.3
地域別 関東甲信越	23年	(1825)	55.7	32.4	25.9	25.0	15.1	16.4	14.7	13.9	11.6	6.4	6.8	5.5	2.5	0.8	32.5	19.0
	20年	(1825)	60.1	39.1	34.2	29.1	14.4	13.3	15.9	12.4		6.2	8.5	5.8	5.3	2.2	29.0	13.6
	17年	(1800)	55.1	35.1	35.7	30.2			11.3			8.0		7.1	7.8	1.9	35.4	4.0
地域別 東海北陸	23年	(786)	58.4	33.1	24.4	21.0	17.7	14.2	16.3	11.6	13.4	6.1	6.5	6.2	2.4	0.8	31.9	20.2
	20年	(780)	60.5	37.2	30.0	27.8	17.1	14.6	18.1	13.5		8.5	7.1	7.7	6.2	0.9	29.5	12.9
	17年	(750)	60.1	33.3	32.1	31.9			10.3			10.4		7.6	8.9	0.9	34.1	5.9
地域別 近畿	23年	(816)	57.8	36.4	22.1	25.9	16.4	16.7	16.3	9.1	10.4	6.6	6.1	5.6	1.8	0.5	34.6	19.5
	20年	(816)	62.1	41.1	27.3	28.9	15.4	17.0	19.0	10.4		8.5	8.7	6.1	4.4	1.7	29.9	10.3
	17年	(850)	59.8	37.5	32.1	34.8			11.6			8.6		6.7	5.8	1.1	36.1	3.6
地域別 中国・四国	23年	(431)	55.5	36.2	21.1	26.9	19.0	19.5	15.1	9.0	9.7	6.5	6.7	6.7	2.6	0.5	28.8	21.1
	20年	(431)	61.9	39.7	30.9	31.1	16.5	18.6	16.5	12.8		7.7	4.6	7.4	7.0	2.3	26.0	9.0
	17年	(450)	58.2	38.7	30.9	30.9			8.9			8.9		5.3	6.7	0.2	36.7	4.2
地域別 九州・沖縄	23年	(583)	57.6	34.1	22.6	28.2	18.4	20.2	14.2	9.3	14.6	7.0	4.8	6.3	1.7	0.7	32.2	18.2
	20年	(583)	62.4	40.0	28.0	32.6	16.5	22.0	13.9	11.8		4.3	8.6	7.2	5.0	2.4	25.9	11.0
	17年	(600)	58.7	37.2	34.8	32.3			9.2			8.0		9.0	8.7	1.8	31.3	4.7

注：17年は「献血は愛に根ざしたものだから」「家族や友人などに勧められたから」「高校に献血バス・出張献血が来たから」「大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから」の回答肢なし。逆に20年は「高校での集団献血、若しくは友人に誘われたから」を削除。17年、20年は「記念品やグッズがもらえるから」の回答肢なし。

（3）現在献血するきっかけ「1位＜最も大きな要因＞」（Q23）

【 現在献血するきっかけの1位は「自分の血液を役立てたい」が4割強 】

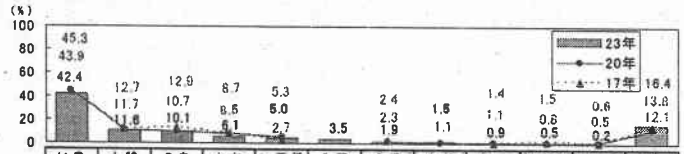
- 現在献血するきっかけを大きい順に3つまで選んでもらったところ、初めての献血のきっかけと同様で、第1位のきっかけでは「自分の血液が役に立ってほしいから」が42.4%で他の項目と比べて圧倒的に高い。その他の項目は1割程度以下で、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(11.6%)、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」(10.1%)が続く。
- 職業別では、大きな差はみられない。
- 性別では、男性に比べて女性で「自分の血液が役に立ってほしいから」(45.0%)が高く、対して男性では「なんとなく」(19.8%)が高い。
- 地域別では、「自分の血液が役に立ってほしいから」が北海道(36.9%)と東北(37.1%)で他の地域に比べて低い。

- ➢ 過去2回調査と比べると、全体の傾向に大きな変化はみられない。
- ➢ 職業別では、「自分の血液が役に立ってほしいから」が20年度調査と比べて高校生と自営業、専業主婦で低下している。
- ➢ 性別では、過去2回調査と比べて大きな変化はみられない。
- ➢ 地域別では、20年度調査と比べると、東北で「自分の血液が役に立ってほしいから」、北海道では「お菓子やジュースがもらえるから」が低下している。

9. 献血するきっかけ 【経験者編】

（3）現在献血するきっかけ「1位＜最も大きな要因＞」（Q23）

Q23. 現在献血するきっかけになっているのは、次のうちどれですか。
きっかけの大きい順に3つまでお選びください。（それぞれひとつずつ）



【基数：対象者全員】

		(N)	自分の血液が役に立ってほしいから	輸血用の血液が不足していると聞いたから	自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから	お菓子やジュースがもらえるから	将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した	記念品やグッズがもらえるから	過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから	献血は愛に根ざしたものだから	輸血を受けるときに役立てたいから	ネールアートやマッサージなどのサービスが受けられるから	テレビやDVDを観ることができるから	なんとなく
全体	23年	(5000)	42.4	11.6	10.1	6.1	5.0	3.5	1.9	1.5	0.9	0.5	0.2	16.4
	20年	(5000)	45.3	11.7	10.7	8.7	5.3		2.3	1.1	1.4	0.8	0.5	12.1
	17年	(5000)	43.9	12.7	12.9	8.5	2.7		2.4		1.1	1.5	0.6	13.8
職業別 高校生	23年	(180)	40.6	7.2	12.2	7.8	3.3	2.8	2.2	1.7	2.2	–	0.6	19.4
	20年	(181)	48.6	8.3	6.6	11.0	3.9		1.7	1.7	1.7	2.2	0.6	13.8
	17年	(87)	37.9	9.2	10.3	8.0	4.6		1.1		3.4	–	2.3	23.0
職業別 大学生・専門学校生	23年	(1481)	43.1	12.7	7.5	7.0	4.4	4.8	2.0	1.8	0.8	0.5	0.1	15.3
	20年	(1453)	44.5	12.9	10.9	10.3	4.1		2.1	1.4	1.9	0.6	0.6	10.8
	17年	(652)	42.0	14.7	12.6	10.1	1.8		2.9		0.9	1.4	0.6	12.9
職業別 会社員	23年	(2019)	41.4	11.3	11.9	5.4	5.3	2.8	1.7	1.6	0.9	0.5	0.2	16.9
	20年	(2152)	43.9	11.5	11.2	7.8	5.9		2.8	0.9	1.5	0.8	0.6	13.1
	17年	(2099)	44.2	13.1	12.7	7.7	2.8		2.9		1.0	1.5	0.7	13.5
職業別 公務員	23年	(225)	44.9	7.6	11.1	5.3	4.9	4.4	2.2	0.4	–	–	–	19.1
	20年	(207)	45.9	9.7	12.6	6.3	3.9		2.9	1.4	1.4	–	1.0	15.0
	17年	(203)	43.3	14.8	18.7	6.4	4.4		0.5		1.5	0.5	0.5	9.4
職業別 自営業	23年	(135)	39.3	13.3	11.9	5.2	7.4	2.2	2.2	0.7	0.7	0.7	–	16.3
	20年	(106)	53.8	8.5	12.3	8.5	3.8		1.9	2.8	0.0	–	0.9	7.5
	17年	(143)	46.9	7.7	11.9	7.7	0.7		4.2		1.4	2.1	2.1	15.4
職業別 専業主婦	23年	(444)	43.0	13.3	8.1	6.5	6.1	3.2	2.3	1.1	0.7	1.1	0.5	14.2
	20年	(448)	54.7	11.6	8.0	7.4	8.7		1.1	0.2	0.4	0.9	–	6.9
	17年	(1067)	46.6	11.6	12.6	8.9	3.6		2.0		0.9	1.7	0.5	11.7
職業別 その他	23年	(516)	44.2	10.9	10.3	5.8	4.7	2.9	1.4	0.8	1.0	0.8	0.2	17.2
	20年	(453)	41.3	11.9	10.8	9.9	4.6		1.8	0.9	0.7	1.3	0.7	16.1
	17年	(749)	41.4	12.0	13.2	9.3	1.7		1.3		1.2	1.6	0.1	18.0
性別 男性	23年	(2518)	39.8	10.7	10.2	5.7	4.7	4.3	1.7	1.6	0.9	0.2	0.3	19.8
	20年	(2556)	43.5	10.1	11.2	8.5	5.0		2.3	1.5	1.6	0.6	0.7	15.1
	17年	(1705)	42.3	12.5	12.4	7.6	2.9		2.2		1.5	1.2	0.9	16.6
性別 女性	23年	(2482)	45.0	12.5	9.9	6.5	5.4	2.7	2.1	1.3	0.8	0.9	0.1	12.9
	20年	(2444)	47.1	13.4	10.2	9.0	5.6		2.4	0.7	1.2	1.0	0.4	9.1
	17年	(3295)	44.8	12.8	13.2	8.9	2.6		2.5		0.9	1.6	0.5	12.3
地域別 北海道	23年	(206)	36.9	14.6	10.2	4.9	8.8	2.4	3.4	0.5	0.5	–	–	19.9
	20年	(210)	37.1	15.2	11.9	13.3	4.3		2.4	0.5	2.9	0.5	0.5	11.4
	17年	(200)	50.0	8.0	11.0	10.0	2.5		4.0		1.5	1.0	0.5	11.5
地域別 東北	23年	(353)	37.1	10.8	8.5	9.6	4.0	5.1	1.4	1.1	0.3	0.6	–	21.5
	20年	(355)	42.8	13.8	11.5	7.9	4.8		3.9	0.6	0.8	0.6	0.8	12.7
	17年	(350)	48.3	11.7	13.1	8.0	1.1		2.6		1.7	1.1	0.6	11.7
地域別 関東甲信越	23年	(1825)	40.8	11.3	9.3	7.6	5.5	3.3	1.6	1.9	1.0	0.8	0.2	16.6
	20年	(1825)	44.8	10.5	10.2	10.7	5.3		2.0	1.5	1.0	1.0	0.5	12.4
	17年	(1800)	41.2	11.8	11.4	10.4	2.9		2.4		0.9	2.5	0.7	15.8
地域別 東海北陸	23年	(786)	46.1	10.2	8.4	5.5	5.6	4.3	1.5	1.3	0.8	0.1	0.4	15.9
	20年	(780)	46.5	11.4	8.5	9.2	5.0		2.7	0.6	1.3	0.6	0.8	13.3
	17年	(750)	44.8	13.5	14.3	6.4	3.1		2.1		1.3	0.8	0.9	12.8
地域別 近畿	23年	(816)	43.5	12.7	10.5	4.4	4.0	3.7	2.1	1.3	0.9	0.6	0.2	15.9
	20年	(816)	46.8	12.1	11.4	6.5	5.9		1.7	1.6	1.3	1.2	0.4	11.0
	17年	(850)	44.6	14.8	15.3	5.1	2.4		2.5		0.9	0.9	0.4	13.2
地域別 中国・四国	23年	(431)	41.5	12.5	15.5	3.9	4.9	2.3	0.7	1.2	1.6	0.5	0.2	15.1
	20年	(431)	45.5	12.5	11.4	6.3	6.0		1.9	0.7	2.3	0.2	0.9	12.3
	17年	(450)	43.6	14.7	10.2	8.9	2.4		2.4		1.3	0.7	0.4	15.3
地域別 九州・沖縄	23年	(583)	46.7	11.3	10.8	4.6	4.3	3.1	3.4	1.2	0.5	0.3	0.2	13.6
	20年	(583)	47.0	12.2	12.9	5.7	5.1		2.9	0.5	1.8	0.5	0.3	11.0
	17年	(600)	45.7	12.0	14.7	9.5	3.3		1.7		0.8	1.2	0.5	10.7

注：17年は「献血は愛に根ざしたものだから」の回答肢なし。17年、20年は「記念品やグッズがもらえるから」の回答肢なし。

（4）現在献血するきっかけ「1位～3位累計」（Q23）

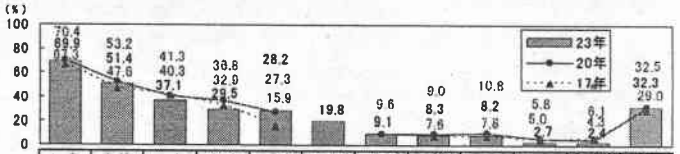
【 現在献血するきっかけ(累計)は「自分の血液を役立てたい」が7割弱 】

- 現在献血するきっかけを1～3位の累計でみると、「自分の血液が役に立ってほしいから」が69.9%と7割弱にのぼりトップ。初めての献血のきっかけと同様、最も強いきっかけになっている。次いで、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(51.4%)、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」(37.1%) が続く。
- 職業別では、高校生で「献血は愛に根ざしたものだから」(20.0%)や「過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから」(15.0%)が他の層と比べて高い。また専業主婦では「自分の血液が役に立ってほしいから」(77.0%)、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(56.5%)が他の層と比べて高く、役立つことができればといった意識が高い。
- 性別では、男性に比べて女性で「自分の血液が役に立ってほしいから」(73.0%)、「輸血用の血液が不足していると聞いたから」(54.1%)が高い。対して女性に比べて男性で「記念品やグッズがもらえるから」(22.0%)や「なんとなく」(35.5%)といったきっかけが高い。
- 地域別では、東北で「記念品やグッズがもらえるから」(26.9%)、「お菓子やジュースがもらえるから」(35.7%)が他の地域と比べて高い。

- 17年度調査と20年度調査を比べると、全体では「輸血用の血液が不足していると聞いたから」「将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」が上昇した。20年度調査と23年度調査を比べると「お菓子やジュースがもらえるから」が低下している。
- 職業別では、20年度調査と比べると、自営業で「自分の血液が役に立ってほしいから」が大きく低下しており、一方で「将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」が上昇している。
- 性別・地域別の各層で、「お菓子やジュースがもらえるから」が20年度調査と比べて低下している。
- 地域別では、東北で「自分の血液が役に立ってほしいから」、「将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した」が20年度調査と比べて低下した。また「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」が東海北陸と九州・沖縄で17年度調査から低下傾向にある。

（4）現在献血するきっかけ「1位～3位累計」（Q23）

Q23. 現在献血するきっかけになっているのは、次のうちどれですか。
きっかけの大きい順に3つまでお選びください。（それぞれひとつずつ）



【母数:対象者全員】

		(N)	自分の血液が役に立ってほしいから	輸血用の血液が不足していると聞いたから	自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから	お菓子やジュースがもらえるから	将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した	記念品やグッズがもらえるから	献血は愛に根ざしたものだから	過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから	輸血を受けるときに役立てたいから	テレビやDVDを観ることができるから	ネールアートやマッサージなどのサービスが受けられるから	なんとなく
全体	23年	(5000)	69.9	51.4	37.1	29.5	28.2	19.8	9.1	8.3	8.2	2.7	2.4	32.3
	20年	(5000)	70.4	53.2	40.3	38.8	27.3		9.6	9.0	10.8	5.8	4.3	32.5
	17年	(5000)	67.3	47.6	41.3	32.9	15.9			7.6	7.8	5.0	6.1	29.0
職業別 高校生	23年	(180)	67.2	47.8	30.6	32.8	20.0	19.4	20.0	15.0	10.6	2.8	0.6	32.2
	20年	(181)	71.8	49.2	27.6	44.8	21.5		16.6	13.3	9.9	5.5	9.4	30.4
	17年	(87)	54.0	43.7	35.6	41.4	12.6			8.0	17.2	6.9	6.9	34.4
大学生・専門学校生	23年	(1481)	67.7	53.5	35.9	33.2	27.1	22.5	9.5	8.8	8.6	3.4	2.0	28.8
	20年	(1453)	69.4	53.0	40.3	40.1	25.3		10.2	8.6	11.9	6.3	3.1	31.9
	17年	(652)	66.0	49.4	39.6	38.3	12.4			8.9	7.1	5.8	6.0	31.6
会社員	23年	(2019)	69.7	49.5	38.5	27.7	28.9	19.1	9.4	8.5	8.0	2.5	2.5	34.3
	20年	(2152)	69.6	53.0	40.5	34.7	28.9		9.3	9.4	10.8	5.6	4.1	34.2
	17年	(2099)	66.6	49.1	41.8	31.6	15.9			8.3	7.8	5.1	5.6	28.5
公務員	23年	(225)	74.7	44.9	38.7	28.0	31.1	21.3	8.0	7.6	6.7	2.7	2.2	33.8
	20年	(207)	73.4	53.1	43.5	31.4	31.4		11.1	8.7	10.6	5.3	2.4	29.0
	17年	(203)	74.9	53.2	48.8	30.5	18.7			6.4	6.4	7.4	4.4	22.2
自営業	23年	(135)	62.2	50.4	36.3	28.9	37.0	20.0	10.4	5.9	8.1	2.2	4.4	31.9
	20年	(106)	75.5	53.8	43.4	34.9	23.6		17.0	7.5	4.7	5.7	6.6	29.2
	17年	(143)	65.7	42.0	41.3	25.9	11.9			11.9	9.8	8.4	7.0	30.8
専業主婦	23年	(448)	77.0	56.5	36.9	26.7	30.2	17.6	6.3	7.0	7.2	2.5	3.8	29.1
	20年	(448)	76.1	58.0	38.8	31.3	32.8		8.3	8.0	8.9	4.7	6.7	26.3
	17年	(1067)	71.2	45.7	40.8	33.6	21.0			6.6	7.5	3.8	6.9	25.3
その他	23年	(516)	71.9	52.5	43.0	28.5	26.2	15.9	5.6	6.2	8.3	1.4	1.9	36.6
	20年	(453)	68.4	52.1	43.5	41.5	22.3		5.5	8.2	11.0	6.6	5.3	35.5
	17年	(749)	65.0	44.7	40.7	31.6	12.3			5.2	7.7	4.3	6.4	34.0
性別 男性	23年	(2518)	66.8	48.7	37.0	28.7	27.0	22.0	10.3	8.5	9.4	2.8	1.9	35.5
	20年	(2556)	68.2	50.3	40.4	36.3	25.7		11.7	9.6	12.3	6.2	3.5	35.8
	17年	(1705)	65.5	46.4	40.6	29.7	15.4			7.7	9.1	6.0	5.0	31.4
女性	23年	(2482)	73.0	54.1	37.3	30.4	29.4	17.6	7.9	8.1	6.9	2.6	2.9	29.0
	20年	(2444)	72.6	56.3	40.1	37.3	28.9		7.4	8.4	9.2	5.4	5.2	29.1
	17年	(3295)	68.3	48.3	41.6	34.5	16.2			7.5	7.1	4.6	6.6	27.7
地域別 北海道	23年	(206)	69.9	51.5	37.9	28.2	27.7	15.0	7.3	11.2	9.7	1.9	1.9	35.4
	20年	(210)	65.7	58.1	41.9	41.4	25.7		9.5	7.1	12.9	2.9	4.8	31.9
	17年	(200)	69.0	46.0	37.0	36.5	19.5			8.0	9.5	3.5	5.0	29.5
東北	23年	(353)	67.1	48.7	36.8	35.7	24.9	26.9	6.5	5.9	8.5	1.4	0.6	38.2
	20年	(355)	72.1	52.4	38.9	36.1	30.4		9.9	10.7	6.5	3.9	3.4	35.8
	17年	(350)	71.7	49.4	41.7	30.9	16.0			6.6	10.9	4.6	4.9	26.6
関東甲信越	23年	(1825)	67.7	49.9	37.0	32.1	28.2	19.3	9.9	8.3	8.2	2.7	3.2	32.5
	20年	(1825)	68.9	51.0	38.9	39.8	25.7		10.8	8.4	10.7	6.2	5.4	34.0
	17年	(1800)	64.3	45.7	37.8	35.8	15.7			7.1	7.4	4.9	7.9	31.1
東海北陸	23年	(786)	72.4	48.6	33.0	29.1	28.6	22.9	9.3	8.0	7.8	3.8	1.9	32.4
	20年	(780)	72.4	52.8	39.5	36.5	27.1		8.3	10.8	10.8	6.9	3.8	31.3
	17年	(750)	68.7	46.7	42.0	31.7	17.3			9.7	7.5	7.6	5.2	27.6
近畿	23年	(816)	70.8	56.3	38.2	25.4	29.3	17.5	9.2	8.6	8.3	2.1	2.2	31.1
	20年	(816)	70.5	55.0	40.9	31.9	32.1		10.0	8.8	11.2	5.0	4.3	30.9
	17年	(850)	68.1	49.5	45.3	28.5	15.6			6.4	7.3	4.1	5.6	28.8
中国・四国	23年	(431)	70.3	53.6	42.5	22.5	29.0	15.3	9.7	9.0	11.1	2.6	2.6	29.9
	20年	(431)	70.5	56.1	41.1	36.9	26.2		7.9	10.0	11.1	5.8	3.0	30.9
	17年	(450)	68.4	50.4	38.4	29.1	13.8			6.4	6.4	2.9	2.4	31.3
九州・沖縄	23年	(583)	73.6	52.8	36.9	30.0	27.6	20.8	8.1	8.1	6.7	3.1	1.7	30.2
	20年	(583)	72.6	55.9	45.1	33.1	25.0		8.2	7.7	12.2	6.0	3.1	31.0
	17年	(600)	69.8	49.5	48.5	34.7	15.8			6.5	8.7	6.0	6.0	24.4

注：17年は「献血は愛に根ざしたものだから」の回答肢なし。17年、20年は「記念品やグッズがもらえるから」の回答肢なし。

（1）家族の献血の有無（Q24）

【 家族が献血している姿を見た経験がある人は2割強 】

- 家族が献血している姿を見たことが「ある」という人は24.3%で4人中1人の割合。
- 職業別では、専業主婦で見たことが「ある」人は32.0%で3割を超え、他の層と比べて高い。また高校生でも「ある」の割合が28.9%にのぼり、やや高い。
- 性別では、女性で見たことが「ある」人(29.0%)は男性(19.7%)に比べて9ポイント高い。
- 地域別による大きな差はみられない。

- ➢ 20年度調査と比べると、全体での大きな変化はみられない。
- ➢ 職業別では、高校生で20年度調査と比べて見たことが「ある」人の割合が上昇している。
- ➢ 性別では、大きな変化はみられない。
- ➢ 地域別では、北海道で20年度調査と比べて見たことが「ある」人の割合が上昇している。

（1）家族の献血の有無（Q24）

Q24. ご家族が献血している姿を見たことがありますか。

【基数:対象者全員】

			(N)	ある	ない	おぼえていない
全体		23年	(5000)	24.3	67.0	8.7
		20年	(5000)	21.8	70.6	7.6
職業別	高校生	23年	(180)	28.9	60.6	10.6
		20年	(181)	23.2	65.2	11.6
	大学生・専門学校生	23年	(1481)	24.2	67.2	8.6
		20年	(1463)	20.0	71.9	8.1
	会社員	23年	(2019)	22.8	68.2	9.0
		20年	(2152)	20.9	71.3	7.8
	公務員	23年	(225)	20.9	71.6	7.6
		20年	(207)	18.8	74.4	6.8
	自営業	23年	(135)	23.0	65.9	11.1
		20年	(106)	22.6	70.8	6.6
	専業主婦	23年	(444)	32.0	61.0	7.0
		20年	(448)	32.4	64.3	3.3
	その他	23年	(516)	24.0	67.6	8.3
		20年	(453)	21.6	69.8	8.6
性別	男性	23年	(2518)	19.7	69.8	10.6
		20年	(2556)	16.8	73.7	9.5
	女性	23年	(2482)	29.0	64.2	6.8
		20年	(2444)	27.0	67.4	5.6
地域別	北海道	23年	(206)	27.2	66.5	6.3
		20年	(210)	21.0	71.4	7.6
	東北	23年	(353)	22.7	70.0	7.4
		20年	(355)	23.9	71.0	5.1
	関東甲信越	23年	(1825)	21.6	69.5	8.9
		20年	(1825)	20.7	71.9	7.5
	東海北陸	23年	(786)	26.1	65.8	8.1
		20年	(780)	22.2	70.3	7.6
	近畿	23年	(816)	25.0	65.2	9.8
		20年	(816)	23.2	68.0	8.8
	中国・四国	23年	(431)	26.7	63.8	9.5
		20年	(431)	23.7	67.7	8.6
	九州・沖縄	23年	(583)	27.6	64.2	8.2
		20年	(583)	20.2	72.4	7.4

（2）友人の献血の有無（Q25）

【 献血経験のある友人がいる人は6割 】

- 友人に献血をしている人がいるかをたずねたところ、6割（59.8%）が献血をしている友人が「いる」と回答した。
- 職業別では、「いる」の割合が特に高いのは大学生・専門学校生(67.9%)と公務員(70.2%)で、7割にのぼる。一方、高校生(53.3%)、自営業(47.4%)、専業主婦(53.8%)では半数前後にとどまり、他の層に比べると低い。
- 性別・地域別で、大きな差はみられない。

- ➢ 20年度調査と比べると、全体での大きな変化はみられない。
- ➢ 職業別・性別では、20年度調査と比べて大きな変化はみられない。
- ➢ 地域別では、東北で「いる」の割合が20年度調査と比べて6ポイント低下している。

（2）友人の献血の有無（Q25）

Q25. あなたのお友達に献血をしている人はいますか。

【基数：対象者全員】 (N) (%)

			(N)	いる	いない	わからない
全体		23年	(5000)	59.8	14.4	25.8
		20年	(5000)	59.7	15.4	25.0
職業別	高校生	23年	(180)	53.3	19.4	27.2
		20年	(181)	56.9	18.2	24.9
	大学生・専門学校生	23年	(1481)	67.9	10.7	21.3
		20年	(1453)	66.3	12.3	21.3
	会社員	23年	(2019)	58.2	15.3	26.5
		20年	(2152)	58.5	16.2	25.3
	公務員	23年	(225)	70.2	11.1	18.7
		20年	(207)	69.6	13.5	16.9
	自営業	23年	(135)	47.4	19.3	33.3
		20年	(106)	47.2	18.9	34.0
	専業主婦	23年	(444)	53.8	16.2	30.0
		20年	(448)	54.5	14.1	31.5
	その他	23年	(516)	48.6	18.8	32.6
		20年	(453)	48.3	21.4	30.2
性別	男性	23年	(2518)	57.7	15.1	27.2
		20年	(2556)	56.0	17.0	27.0
	女性	23年	(2482)	61.9	13.8	24.3
		20年	(2444)	63.5	13.7	22.8
地域別	北海道	23年	(206)	63.1	10.2	26.7
		20年	(210)	60.5	13.8	25.7
	東北	23年	(353)	63.5	14.2	22.4
		20年	(355)	69.9	11.8	18.3
	関東甲信越	23年	(1825)	58.2	15.3	26.5
		20年	(1825)	57.1	17.6	25.3
	東海北陸	23年	(786)	62.6	14.6	22.8
		20年	(780)	60.0	11.9	28.1
	近畿	23年	(816)	56.9	15.0	28.2
		20年	(816)	58.7	17.0	24.3
	中国・四国	23年	(431)	59.6	13.7	26.7
		20年	(431)	61.3	13.5	25.3
	九州・沖縄	23年	(583)	61.9	13.0	25.0
		20年	(583)	60.9	14.8	24.4

（3）高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか（Q26）

【 高校での集団献血がその後の動機づけに有効という意見は8割強 】

- 高校での集団献血の経験がその後の献血する動機付けになると思うかたずねたところ、「非常に有効」が36.6%で、「どちらかと言えば有効」が47.5%。両者を合わせた有効層は84.1%にのぼる。
- 職業別では、自営業での有効層が77.8%にとどまり、他の層と比べて低い。
- 性別では、女性の有効層(86.8%)が男性(81.3%)と比べて高い。
- 地域別では、大きな差はみられない。

- 高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるかを、初めて献血した場所で分析した。
※下図参照
高校で初めて献血した人では有効層が91.4%にのぼり高い。またその中でも「非常に有効」と考える割合が高く、全体の半数(49.9%)を占める。高校での集団献血の経験がその後の献血の動機付けに大きな役割を果たす可能性が示唆される。

- ➢ 17年度調査と20年度調査を比べると、全体での有効層は19ポイント上昇し大幅に上昇した。23年度調査は20年度調査の結果と大きく変わらない。性別・地域別でみても、各層で同様の傾向となった。
- ➢ 職業別では、17年度調査と20年度調査を比べると、各層とも大幅に有効層の割合が上昇している。20年度調査と23年度調査を比べると、自営業で「非常に有効」と考える割合が低下し、「どちらかと言えば有効」と考える層が上昇しており、評価が下がっている。

＜関連質問の回答別＞

【基数：対象者全員】 (%)

			(N)	非常に有効	どちらかと言えば有効	あまり関係ない	全く関係ない	有効(計)	関係ない(計)
全体		23年	(5000)	36.6	47.5	12.1	3.8	84.1	15.9
		20年	(5000)	36.4	48.2	11.7	3.7	84.6	15.4
初めて献血した場所	高校	23年	(793)	49.9	41.5	7.1	1.5	91.4	8.6
		20年	(902)	44.9	43.7	8.9	2.5	88.6	11.4
	大学キャンパス又は専門学校・各種学校	23年	(1058)	37.7	46.2	12.1	4.0	83.9	16.1
		20年	(1062)	35.8	49.8	11.2	3.2	85.6	14.4
	職場	23年	(262)	35.9	50.0	11.1	3.1	85.9	14.2
		20年	(240)	41.7	42.5	12.9	2.9	84.2	15.8
	献血バス（上記以外）	23年	(1091)	35.7	48.1	12.0	4.2	83.8	16.2
		20年	(1048)	32.4	52.4	11.5	3.7	84.8	15.2
	献血ルーム（血液センター）	23年	(1661)	31.2	51.0	14.1	3.6	82.2	17.7
		20年	(1641)	35.0	47.5	13.7	3.8	82.6	17.4
	覚えていない	23年	(135)	23.0	40.0	20.7	16.3	63.0	37.0
		20年	(107)	20.6	50.5	12.1	16.8	71.0	29.0

（3）高校での集団献血がその後の献血への動機付けとなるか（Q26）

Q26. 高校での集団献血があれば、その経験がその後に献血する動機付けになると思いますか。

【基数：対象者全員】 (%)

			(N)	非常に有効	どちらかと言えば有効	あまり関係ない	全く関係ない	有効(計)	関係ない(計)
全体		23年	(5000)	36.6	47.5	12.1	3.8	84.1	15.9
		20年	(5000)	36.4	48.2	11.7	3.7	84.6	15.4
		17年	(5000)	20.4	45.5	22.4	11.7	65.9	34.1
職業別	高校生	23年	(180)	38.3	44.4	13.3	3.9	82.7	17.2
		20年	(181)	35.9	49.2	8.8	6.1	85.1	14.9
		17年	(87)	20.7	35.6	28.7	14.9	56.3	43.7
	大学生・専門学校生	23年	(1481)	35.7	48.4	12.4	3.5	84.1	15.9
		20年	(1453)	35.1	49.1	12.0	3.9	84.2	15.8
		17年	(652)	18.1	45.2	23.9	12.7	63.3	36.7
	会社員	23年	(2019)	37.4	45.0	12.2	4.4	83.4	16.6
		20年	(2152)	36.5	47.8	11.9	3.8	84.3	15.7
		17年	(2099)	21.0	44.4	23.2	11.5	65.4	34.6
	公務員	23年	(225)	38.7	50.2	9.3	1.8	88.9	11.1
		20年	(207)	38.2	44.9	13.0	3.9	83.1	16.9
		17年	(203)	25.6	48.8	18.2	7.4	74.4	25.6
	自営業	23年	(135)	28.9	48.9	17.8	4.4	77.8	22.2
		20年	(106)	41.5	36.8	14.2	7.5	78.3	21.7
		17年	(143)	21.0	46.9	21.0	11.2	67.8	32.2
	専業主婦	23年	(444)	41.7	43.5	12.8	2.0	85.2	14.8
		20年	(448)	41.5	51.1	6.9	0.4	92.6	7.4
		17年	(1087)	21.8	50.0	18.5	9.7	71.8	28.2
	その他	23年	(516)	32.0	53.7	9.9	4.5	85.7	14.4
		20年	(453)	33.6	47.9	15.0	3.5	81.5	18.5
		17年	(749)	17.5	42.3	25.4	14.8	59.8	40.2
性別	男性	23年	(2518)	34.4	46.9	13.4	5.3	81.3	18.7
		20年	(2556)	34.9	47.3	12.7	5.0	82.3	17.7
		17年	(1705)	19.4	41.3	26.7	12.6	60.7	39.3
	女性	23年	(2482)	38.7	48.1	10.8	2.3	86.8	13.1
		20年	(2444)	38.0	49.0	10.8	2.2	87.0	13.0
		17年	(3295)	21.0	47.6	20.2	11.2	68.6	31.4
地域別	北海道	23年	(208)	33.5	49.5	11.7	5.3	83.0	17.0
		20年	(210)	35.7	48.1	12.4	3.8	83.8	16.2
		17年	(200)	16.0	49.0	25.5	9.5	65.0	35.0
	東北	23年	(353)	36.0	49.3	11.6	3.1	85.3	14.7
		20年	(355)	40.0	45.6	10.4	3.9	85.6	14.4
		17年	(350)	24.0	48.0	17.4	10.6	72.0	28.0
	関東甲信越	23年	(1825)	37.2	45.0	13.3	4.4	82.2	17.7
		20年	(1825)	33.4	49.5	12.9	4.2	82.9	17.1
		17年	(1800)	19.9	44.3	22.5	13.3	64.2	35.8
	東海北陸	23年	(786)	39.2	47.2	10.8	2.8	86.4	13.6
		20年	(780)	37.6	48.1	10.6	3.7	85.6	14.4
		17年	(750)	20.9	46.1	21.9	11.1	67.1	32.9
	近畿	23年	(816)	34.1	51.1	10.8	3.0	85.2	14.8
		20年	(816)	36.3	48.2	12.3	3.3	84.4	15.6
		17年	(850)	18.4	46.5	24.2	10.9	64.8	35.2
	中国・四国	23年	(431)	34.8	48.5	12.8	3.9	83.3	16.7
		20年	(431)	36.2	50.8	10.7	2.3	87.0	13.0
		17年	(450)	19.1	44.4	25.8	10.7	63.6	36.4
	九州・沖縄	23年	(583)	37.2	48.0	12.2	2.6	85.2	14.8
		20年	(583)	42.9	43.7	10.1	3.3	86.6	13.4
		17年	(600)	24.7	45.0	19.7	10.7	69.7	30.3

（1）献血の必要性への理解の深まり（Q27－1）

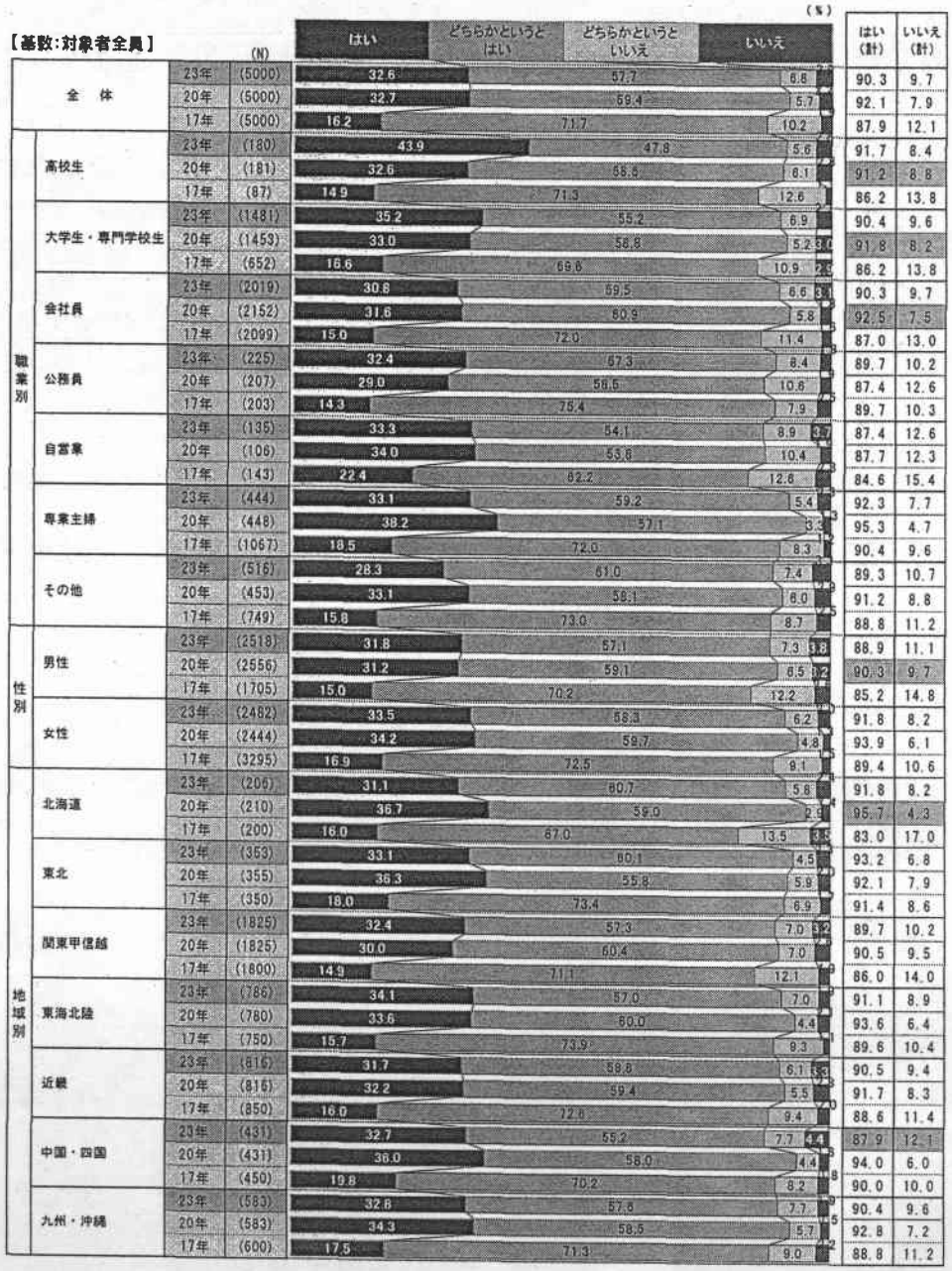
【 資料を読んで献血の必要性への理解が深まった人は9割 】

- 献血に関する資料の閲読後に、献血の必要性への理解が深まったかをたずねたところ、「はい(深まった)」が32.6%で「どちらかというとはい(どちらかというと深まった)」が57.7%。両者を合わせると、理解が深まった層は90.3%にのぼる。
- 職業別では、各層とも理解が深まった層が9割前後を占めて高い。特に高校生では「はい(深まった)」と回答した人の割合が43.9%にのぼり、他の層と比べて評価が高い。
- 性別・地域別での大きな差はみられない。

- ➢ 17年度調査と20年度調査を比べると、全体の「はい(深まった)」と回答した人の割合が17ポイント上昇し大幅に上昇した。20年度調査と23年度調査では大きな変化はみられない。
- ➢ 職業別では、過去2回調査と比べると、高校生で「どちらかというとはい(どちらかというと深まった)」の意見が低下傾向で、かわりに「はい(深まった)」が上昇傾向にある。より理解の深まりがみられた。
- ➢ その他職業別・性別・地域別では、各層で20年度調査と大きな変化はみられない。

（1）献血の必要性への理解の深まり（Q27－1）

Q27. 献血に関する資料を読まれた後で次の質問にお答え下さい。
1）献血の必要性への理解は今までと比べ深まりましたか。



（2）献血に協力する意識の高まり（Q27－2）

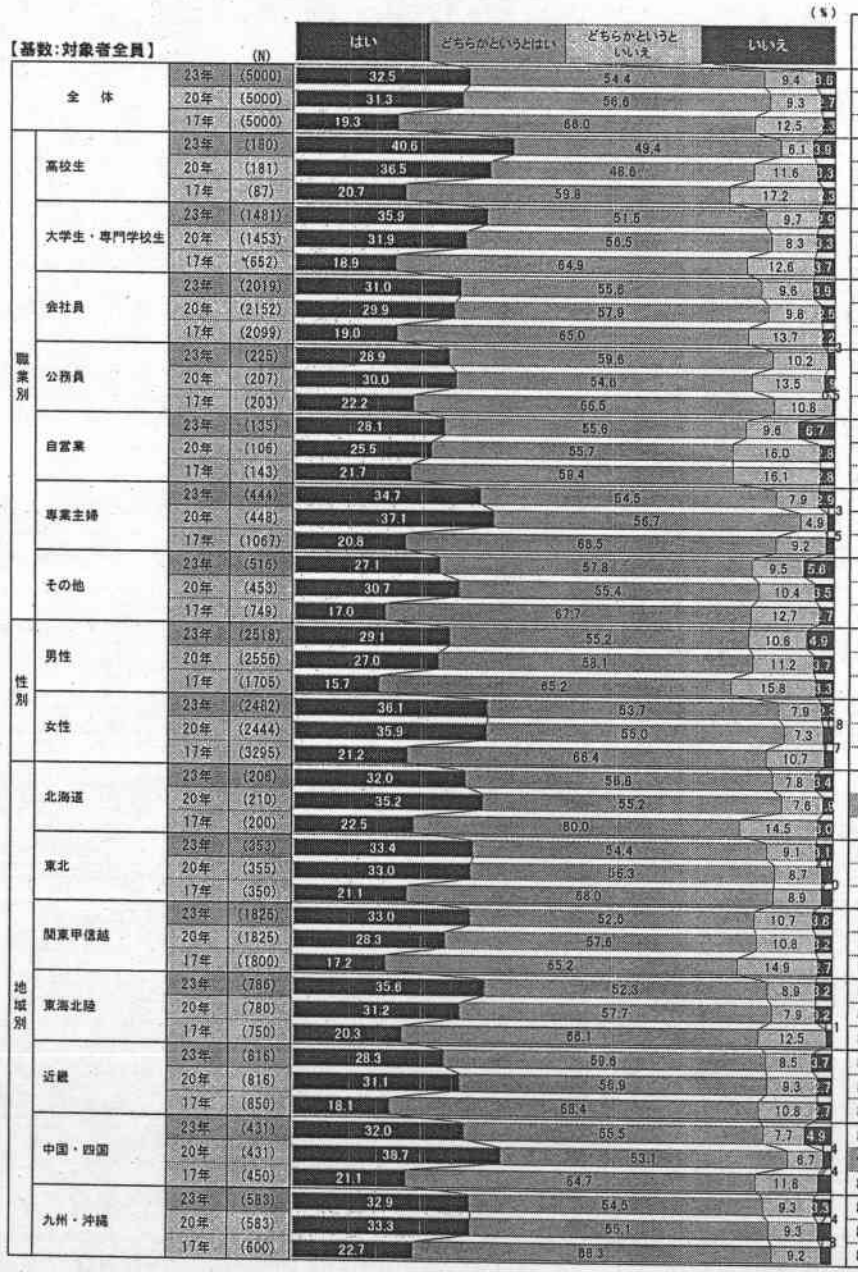
【 献血に協力する意識が高まった人は9割弱 】

- 献血に関する資料の閲読後に、献血に協力する気持ちが高まったかをたずねたところ、「はい(高まった)」(32.5%)と「どちらかというとはい(どちらかというと高まった)」(54.4%)を合わせた高まった層は9割弱(86.9%)にのぼり、資料閲読による献血協力意向の高まりがみられた。
- 職業別では、意識が高まった層の割合は高校生(90.0%)で最も高かった。また高校生では「はい(高まった)」(40.6%)と回答している人の割合が他の層と比べて高い。資料の閲読が高校生に対する献血意向促進に効果的であったことがわかる。
- 性別では、女性の高まった層の割合(89.8%)が男性の高まった層の割合(84.3%)と比べて高い。
- 地域別では、大きな差はみられない。

➢ 過去2回調査と比べると、全体での意識が高まった層の割合に変化はみられない。ただし17年度調査と20年度調査を比べると「はい(高まった)」の割合が上昇しており、評価が高くなっている。職業別・性別・地域別でみても、各層とも概ね同様の傾向である。

（2）献血に協力する意識の高まり（Q27－2）

Q27. 献血に関する資料を読まれた後で次の質問にお答え下さい。
2）資料を読んで献血に協力する気持ちは高まりましたか。



（3）献血回数の増加意向喚起（Q27－3）

【 今後の献血意向が増加した人は8割強 】

- 献血に関する資料の閲読後に、献血に行く回数を増やそうと思ったかたずねたところ、「はい(増やそうと思う)」の28.9%と、「どちらかというとはい(どちらかというと増やそうと思う)」(53.8%)を合わせた意向が喚起された層は82.7%を占める。資料を閲読することによって、献血回数増加の意向を喚起できることがわかる。
- 職業別では、高校生で意向が喚起された層の割合が89.5%にのぼり9割弱を占めて、他の層と比べて高い。
- 性別では、女性で意向が喚起された割合(86.0%)が男性(79.3%)に比べて高い。
- 地域別では、大きな差はみられない。

- ➢ 過去2回調査と比べると、全体での意向が喚起された層の割合に変化はみられない。ただし17年度調査と20年度調査を比べると「はい(増やそうと思う)」の割合が上昇しており、より意向が喚起されている。
- ➢ 職業別では、20年度調査と比べて、意向が高まった層の割合が高校生で上昇し、専業主婦では低下した。
- ➢ 性別・地域別では、20年度調査と比べて概ね大きな変化はみられない。

（3）献血回数の増加意向喚起（Q27－3）

Q27. 献血に関する資料を読まれた後で次の質問にお答え下さい。
3）アンケートへの記載及び資料を読んで献血に行く回数を増やそうと思いましたか。

【基数:対象者全員】 (%)

			(N)	はい	どちらかというとはい	どちらかというといいえ	いいえ	はい(計)	いいえ(計)
全体		23年	(5000)	28.9	53.8	12.3	5.1	82.7	17.4
		20年	(5000)	28.5	54.4	13.0	4.1	83.0	17.0
		17年	(5000)	19.7	62.8	14.3	3.2	82.5	17.5
職業別	高校生	23年	(180)	33.9	55.6	8.3	2.2	89.5	10.5
		20年	(181)	35.4	44.8	13.8	6.1	80.1	19.9
		17年	(87)	20.7	60.9	14.9	3.4	81.6	18.4
	大学生・専門学校生	23年	(1481)	32.4	51.0	12.6	4.1	83.4	16.7
		20年	(1453)	29.4	54.0	12.3	4.3	83.4	16.6
		17年	(652)	20.9	60.0	14.1	5.1	80.8	19.2
	会社員	23年	(2019)	27.8	54.3	12.6	5.3	82.1	17.9
		20年	(2152)	26.9	56.0	13.4	3.8	82.9	17.1
		17年	(2099)	19.3	62.8	15.1	3.0	81.9	18.1
	公務員	23年	(225)	28.0	54.2	14.2	3.6	82.2	17.8
		20年	(207)	28.5	50.2	17.4	3.9	78.7	21.3
		17年	(203)	23.6	60.6	13.8	[illegible]	84.2	15.8
	自営業	23年	(135)	25.9	51.9	14.1	8.1	77.8	22.2
		20年	(106)	25.5	51.9	18.9	3.8	77.4	22.6
		17年	(143)	15.4	64.3	16.1	4.2	79.7	20.3
	専業主婦	23年	(444)	28.8	55.2	9.9	6.1	84.0	16.0
		20年	(448)	33.7	56.5	7.8	[illegible]	90.2	9.8
		17年	(1067)	20.5	65.9	11.8	[illegible]	86.4	13.6
	その他	23年	(516)	22.1	58.1	12.6	7.2	80.2	19.8
		20年	(453)	26.5	52.8	14.8	6.2	79.2	20.8
		17年	(749)	17.9	62.2	15.5	4.4	80.1	19.9
性別	男性	23年	(2518)	25.3	54.0	14.2	6.6	79.3	20.8
		20年	(2556)	24.6	54.2	16.0	5.2	78.8	21.2
		17年	(1705)	16.4	62.1	17.2	4.3	78.5	21.5
	女性	23年	(2482)	32.5	53.5	10.4	3.6	86.0	14.0
		20年	(2444)	32.6	54.7	9.8	2.9	87.3	12.7
		17年	(3295)	21.3	63.2	12.8	2.6	84.6	15.4
地域別	北海道	23年	(206)	30.6	55.3	10.2	3.9	85.9	14.1
		20年	(210)	35.2	51.9	7.6	5.2	87.1	12.9
		17年	(200)	23.5	55.5	16.5	4.5	79.0	21.0
	東北	23年	(353)	27.2	56.1	13.0	3.7	83.3	16.7
		20年	(355)	28.2	55.2	13.8	2.8	83.4	16.6
		17年	(350)	23.4	61.1	11.7	3.7	84.6	15.4
	関東甲信越	23年	(1825)	28.7	52.4	13.2	5.7	81.1	18.9
		20年	(1825)	26.4	54.4	14.5	4.7	80.8	19.2
		17年	(1800)	17.2	62.1	17.1	3.7	79.2	20.8
	東海北陸	23年	(788)	30.8	53.2	11.3	4.7	84.0	16.0
		20年	(780)	30.0	53.5	12.1	4.5	83.5	16.5
		17年	(750)	19.2	65.6	12.9	2.3	84.8	15.2
	近畿	23年	(816)	27.7	54.8	12.7	4.8	82.5	17.5
		20年	(816)	27.5	55.9	13.5	1.2	83.3	16.7
		17年	(850)	18.5	65.2	13.4	2.9	83.6	16.4
	中国・四国	23年	(431)	27.1	55.5	10.9	6.5	82.6	17.4
		20年	(431)	32.3	53.8	11.1	2.8	86.1	13.9
		17年	(450)	22.9	61.3	13.3	[illegible]	84.2	15.8
	九州・沖縄	23年	(583)	30.2	54.0	11.5	4.3	84.2	15.8
		20年	(583)	29.8	54.7	11.3	4.1	84.6	15.4
		17年	(600)	23.5	63.0	10.5	3.0	86.5	13.5

（1）若年層の献血協力意向を高めるアイデア（Q28）

【 献血意向を高めるには「処遇品・記念品」、「人気タレント起用」、「身近な献血場所」等 】

● 若年層の献血協力意向を高めるアイデアを自由記述形式でたずねたところ、「処遇品、記念品をよくする／特典をつける」や「報酬をお金にする」といった、献血者に直接メリットがある内容。「人気タレントを使う」や「学校、テレビ、インターネットでのPR」など、より興味を引き、アクセスしやすいPR方法を考える必要があるといった内容。また献血が出来る施設に関しては、「高校や学校、人通りの多い、駅前、繁華街、何かのついでや待ち時間にできる」場所で献血が出来る施設を設ける必要があるといった内容が多くあげられた。

（1）若年層の献血協力意向を高めるアイデア（Q28）

Q28. 若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいと思いますか。広報の方法やキャンペーン、イベント、献血場所などについて具体的なアイデアやイメージなどがあれば自由に記入してください。

【対象者全員】

若年層の献血協力意向を高めるアイデア（記載が多かったもの）
処遇品、記念品をよくする／特典をつける
人気タレントを使う
高校、学校に献血バスがくる
学校の授業で取り入れる／学校でのPR
人通りの多い場所で行う／駅前、繁華街で行う／行きやすい場所で献血できる／何かのついでや待ち時間できる
献血の重要性、必要性をアピール
気軽に行けるような雰囲気作り／入りやすい雰囲気作り／明るい雰囲気作り／親しみを持てるようにする／楽しいイメージにする
テレビでのPR
献血イベントの実施／イベント会場に出張／学園祭に出張
有名人が実際に献血している様子を見せる／同年代の人がやっている姿を見せる／経験談等を広める
献血についての詳しい説明、周知
インターネットでの呼びかけ／インターネット広告／SNSでの呼びかけ／メルマガ
献血することによるメリットを伝える
献血によってどれだけ人が救われるかを示せばいい／献血が患者さんの役に立っている画像または感謝の声を流す
安全性をアピール／恐怖感、抵抗感の払しょく
若者が集まる場所に献血コーナーを設ける／若者が集まる場所でキャンペーンをする
献血ルーム、献血バス自体を増やす
大学キャンパスなどへの出張を増やす／大学でキャンペーンをする
献血できる時間帯をのばす／休日に行う
友達と一緒にできればよい／集団献血
献血にかかる時間を短縮
献血ルーム内でのサービスをよくする
ボランティアでは限界がある／義務化する
量を少なくする／200mL献血、成分献血でも受け付けてほしい
キャンペーンを増やす／もっとよいキャンペーンを行う
報酬をお金にする
職場に献血バスがくる
献血に関する資料をわかりやすくしたほうがよい
もっと宣伝する

付）調査票／呈示資料

スクリーニング用

若年層献血意識調査

SC1 現在お住まいの地域は、以下のうちどちらになりますか。
1. 北海道　2. 東北　3. 関東甲信越　4. 東海北陸　5. 近畿
6. 中国・四国　7. 九州・沖縄

SC2 現在おいくつですか。
1. 15歳以下 ⇒ 対象外
2. 16～17歳
3. 18～19歳
4. 20～24歳
5. 25～29歳
6. 30歳以上 ⇒ 対象外

SC3 あなたの性別を教えてください。
1. 男性　2. 女性

SC4 現在のご職業を教えてください。
1. 高校生　2. 大学生・専門学校生　3. 会社員　4. 公務員　5. 自営業
6. 専業主婦　7. その他(　　)

SC5 あなたは学業及び職業で、医療関係に携わっていますか。
1. はい　2. いいえ

SC6 あなたは、今までに「献血」をされたことがありますか。
1 ある ⇒ 献血経験者用調査票へ
2 ない ⇒ 献血未経験者用調査票へ

献血未経験者用

若年層献血意識調査

問1 献血について知っていますか。
1. よく知っている　2. ある程度知っている　3. まったく知らない

問2 献血の種類(※)を知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※ …献血の種類には、すべての血液の成分を採血する全血献血(200mLまたは400mL)と、
必要な血液の成分だけを採血する成分献血(血漿成分献血または血小板成分献血)があります。

問3 献血がどこでできるか知っていますか。(※)
1. 知っている　2. ある程度知っている　3. 知らない
※ …献血は、①献血ルーム ②献血バス ③血液センター ④会社や団体での出張献血ですることができます。

問4 献血について関心がありますか。
1. 非常に関心がある 2. 関心がある 3. 特に関心がない 4. 全く関心がない

問5 献血は患者さんに対する輸血だけでなく、献血を原料とした血液製剤として、さまざまな
病気の治療に役立っていることを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない

問6 献血された輸血用血液製剤の有効期間は短く、絶えず献血が必要なことを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※ …血液製剤の有効期間は一番短い血小板製剤で採血後4日間、赤血球製剤は21日間です。

問7 献血された輸血用血液製剤の使い道は、交通事故などの大量出血時よりもがんなどの病気の治療に使われること
が圧倒的に多いことを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※ …約8割が病気(うちがんの治療3割)に使われ、交通事故などによる輸血は約1割程度。

問8 輸血の医療を受けられた多くの患者さんは、献血をしてくれた方に感謝(献血してくれてありがとう)の気持ちを
持っています。そのような声を目や耳にしたことはありますか。
1. ある　2. ない

問9 献血へ協力してくださる若い方の数が、近年大幅に減っています(※)。知っていましたか。
1. 知っている　2. 知らない
※ …最近5年間で、20代の献血者数は140万人から108万人(23%減)に、
10代の献血者数は48万人から29万人(40%減)も減少しています。

問10 献血に関して、どのような広報媒体を見たこと(聞いたこと)がありますか(複数回答可)。
1. テレビ　2. FM放送　3. その他のラジオ放送　4. 新聞
5. 街頭での呼びかけ　6. 献血ルーム前の看板・表示　7. チラシの配布
8. ポスターの掲示　9. 献血関係のイベント　10. 自治体の広報誌　11. 雑誌等
12. インターネット　13. 献血バス
14. その他(　　)
15. 何かで見た(聞いた)が、何の媒体か覚えていない
16. 見たこと(聞いたこと)がない

問11 献血のキャンペーンを行う際の効果的な媒体は何だと思いますか(複数回答可)。
1. テレビ　2. FM放送　3. その他のラジオ放送　4. 新聞　5. 雑誌
6. 自治体の広報誌　7. インターネット　8. 携帯電話　9. ポスター
10. その他(　　)

問12 厚生労働省では献血推進のためのキャラクターとして「けんけつちゃん」を作成していますが、知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない

問13 問12で「けんけつちゃん」を知っていると答えた方へお聞きします。
献血推進のキャラクターとして「けんけつちゃん」の印象を教えて下さい。
1. よい　2. わるい　3. どちらともいえない

問14 献血に関するキャンペーンを知っていますか。(複数回答可)
1. 愛の血液助け合い運動(毎年7月)　2. 「はたちの献血」キャンペーン(毎年1～2月)
3. LOVE in Actionキャンペーン(通年)　4. その他(　　)
5. 知らない

献血に関するキャンペーンで、印象に残ったキャッチフレーズやメッセージがあれば、ご記入下さい。

問15 平成2年から、全国の高校3年生を対象に、献血に関する普及啓発資材「HOP STEP JUMP」を
配布していますが、学校で配られた記憶はありますか。
1. 保健体育の授業で使用した　2. 他の授業で使用した　3. 配布されただけ
4. 知らない

※参考(平成23年版 高校生副読本「HOP STEP JUMP」→
http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/23/index.htmlをご覧下さい)

問16 献血でエイズ、肝炎その他の感染症に感染することはありませんが、そのことを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない

問17 血液製剤(※)は未だ海外の血液に依存していることを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※…重症熱傷に用いるアルブミン製剤では、国内自給率は未だ58%台である。

問18 献血ルームのイメージを教えてください。
1. 明るい　2. ふつう　3. 暗い　4. わからない

問19 献血したことがないのはどのような理由からですか。
理由の大きい順に3つまで、その番号をお選びください。
1. 献血を申し込んだが、基準に適合せずに断られた
2. 献血している所に入りづらかったから
3. 呼び込みが強引で嫌だったから
4. 献血場所が遠いので面倒だから
5. 近くに献血する場所や機会がなかったから
6. どこで献血ができるか分からない
7. 時間がかかりそうだから
8. 忙しくて献血する時間がなかったから
9. 自分が献血しなくても誰かがやると思ったから
10. 自分の血液が役に立たないと思ったから
11. 血液が無駄にされていると聞いたから
12. 針を刺すのが痛くて嫌だから
13. なんとなく不安だから
14. 健康上出来ないと思ったから
15. 病気がうつると思ったから
16. 献血すると言ったら、友人や家族からとめられた
17. 血を採られるという感じが嫌だ
18. 恐怖心
19. 職員の態度が悪いので献血したくない
20. 献血する意志がない
21. 海外渡航歴等による献血制限で献血したくてもできない
22. 薬を服用しているので献血ができない
23. その他
24. わからない

1番目[　]　2番目[　]　3番目[　]

23.その他を選んだ場合の具体的な理由

問20 あなたが献血するきっかけとなり得る項目を選択してください。
きっかけの大きい順に3つまで、その番号をお選びください。
なお、13、14番を選択した方は、具体例を教えてください。

1.家族や友人などから勧められた
2.献血しているところが入りやすい雰囲気になった
3.近くに献血する場所ができた(献血ルーム)
4.近くに献血する場所ができた(献血バスまたは出張献血)
5.キャンペーンやイベント等により献血が身近に感じられるようになった
6.好きなタレントがキャンペーンに起用されていた
7.献血の重要性が明確になった
8.血液が無駄になってないことが分かった
9.針が細くなった
10. 針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された(麻酔など)
11. 献血で病気がうつることはないと知った
12. 献血ルームの受付時間が長くなった
13. 献血したときの処遇品(記念品)が良くなった
14. 献血ルームのサービスが良くなった
15. 献血が自分の健康管理の役に立つようになった
16. 職員の態度が良くなった
17. 海外渡航歴等の献血制限が解除された
18. 献血が健康にほとんど害がないということが分かった
19. 献血できる場所が分かった
20. 献血は絶対しない

1番目 [ ]　2番目 [ ]　3番目 [ ]

13. 献血したときの処遇品(記念品)が良くなったを選んだ場合の具体例

[ ]

14. 献血ルームのサービスが良くなったを選んだ場合の具体例

[ ]

20. 献血は絶対しないを選んだ場合の理由

[ ]

問21 血液の有効かつ安全な活用のため、現在では400mLを推奨していますが、仮にあなたが初めて献血する場合、200mLではなく400mLの献血に抵抗を感じますか。
1. はい　2. どちらかというとはい　3. どちらかというといいえ　4. いいえ

問22 ご家族が献血している姿を見たことがありますか。
1. ある　2. ない　3. おぼえていない

問23 あなたのお友達に献血をしている人はいますか。
1. いる　2. いない　3. わからない

問24 献血に関する資料を読まれた後で次の質問にお答え下さい。
画像呈示(資料)

問24-1 献血の必要性への理解は良くなりましたか。
1. はい　2. どちらかというとはい　3. どちらかというといいえ　4. いいえ

問24-2 今は献血に協力する気持ちはありますか。
1. ある　2. どちらかというとある　3. どちらかというとない　4. ない

問24-3 今後、実際に献血に行きますか。
1. はい　2. どちらかというとはい　3. どちらかというといいえ　4. いいえ

問25 若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいと思いますか。
広報の方法やキャンペーン、イベント、献血場所などについて具体的なアイデアやイメージなどがあれば自由に記入してください。

[ ]

以上で献血に関するアンケートは終了です。御協力ありがとうございました。

わが国は、輸血などの血液製剤を献血により安全に安定して国内自給することを目指している世界でも数少ない国です。
今後とも、献血への御理解と御協力をお願いいたします。

なお、最後に、献血推進キャラクター「けんけつちゃん」をどうぞよろしくお願いします。

プロフィールはこちら → http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/1i.html

若年層献血意識調査

献血経験者用

問1　献血は、患者さんに対する輸血だけでなく、献血を原料とした血液製剤として、さまざまな病気の治療に役立っていることを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない

問2　献血された輸血用血液製剤の有効期間は短く、絶えず献血が必要なことを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※　…血液製剤の有効期間は一番短い血小板製剤で採血後4日間、赤血球製剤は21日間です。

問3　献血された輸血用血液製剤の使い道は、交通事故などの大量出血時よりもがんなどの病気の治療に使われることが圧倒的に多いことを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※　…約8割が病気（うちがんの治療3割）に使われ、交通事故などによる輸血は約1割程度。

問4　輸血の医療を受けられた多くの患者さんは、献血をしてくれた方に感謝（献血してくれてありがとう）の気持ちを持っています。そのような声を目や耳にしたことはありますか。
1. ある　2. ない

問5　献血へ協力してくださる若い方の数が、近年大幅に減っています（※）。知っていましたか。
1. 知っている　2. 知らない
※　…最近5年間で、20代の献血者数は140万人から108万人（23%減）に、10代の献血者数は48万人から29万人（40%減）も減少しています。

問6　献血に関して、どのような広報媒体を見たこと（聞いたことが）ありますか（複数回答可）。
1. テレビ　2. FM放送　3. その他のラジオ放送　4. 新聞
5. 街頭での呼びかけ　6. 献血ルーム前の看板・表示　7. チラシの配布
8. ポスターの掲示　9. 献血関係のイベント　10. 自治体の広報誌　11. 雑誌等
12. インターネット　13. 献血バス
14. その他（　　）
15. 何かで見た（聞いた）が、何の媒体か覚えていない
16. 見たこと（聞いたこと）がない

問7　献血のキャンペーンを行う際の効果的な媒体は何だと思いますか（複数回答可）。
1. テレビ　2. FM放送　3. その他のラジオ放送　4. 新聞　5. 雑誌
6. 自治体の広報誌　7. インターネット　8. 携帯電話　9. ポスター
10. その他（　　）

問8　厚生労働省では献血推進のためのキャラクターとして「けんけつちゃん」を作成していますが、知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない

問9　問8で「けんけつちゃん」を知っていると答えた方へお聞きします。
献血推進のキャラクターとして「けんけつちゃん」の印象を教えて下さい。
1. よい　2. わるい　3. どちらともいえない

問10　献血に関するキャンペーンを知っていますか。（複数回答可）
1. 愛の血液助け合い運動（毎年7月）　2. 「はたちの献血」キャンペーン（毎年1～2月）
3. LOVE in Actionキャンペーン（通年）　4. その他（　　）
5. 知らない

献血に関するキャンペーンで、印象に残ったキャッチフレーズやメッセージがあれば、ご記入下さい。

問11　平成2年から、全国の高校3年生を対象に、献血に関する普及啓発資材「HOP STEP JUMP」を配布していますが、学校で配られた記憶はありますか。
1. 保健体育の授業で使用した　2. 他の授業で使用した　3. 配布されただけ
4. 知らない

※参考（平成23年版　高校生副読本「HOP STEP JUMP」→
http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/23/index.htmlをご覧下さい）

問12　献血でエイズ、肝炎その他の感染症に感染することはありませんが、そのことを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない

問13　血液製剤（※）は未だ海外の血液に依存していることを知っていますか。
1. 知っている　2. 知らない
※…重症熱傷に用いるアルブミン製剤では、国内自給率は未だ58%台である

問14　献血ルームのイメージを教えてください。

-1　ルームの雰囲気	1. 明るい	2. ふつう	3. 暗い	4. わからない
-2　ルームの広さについて	1. 広い	2. ふつう	3. 狭い	4. わからない
-3　職員の対応について	1. 良い	2. ふつう	3. 悪い	4. わからない
-4　記念品や軽い飲食物について	1. 良い	2. ふつう	3. 悪い	4. わからない

問15　献血について何か要望又は知りたいことがありますか。（複数回答可）
1. 献血する場所、日時などについて十分知らせてほしい
2. 献血について正しい知識、必要性を知らせてほしい
3. 献血で昼休み、夜間などの受付時間を延長してほしい
4. 職場や学校などで献血の機会を増やしてほしい
5. 献血された血液がどのように使われるのか知りたい
6. 献血したときの処遇品（記念品）をもっと良くしてほしい
7. 進学や就職時に献血の経験を考慮してほしい
8. 学校の授業で献血の重要性等について取り上げてほしい
9. その他（　　）
10. 特にない

問16　初めて献血をしたのはいつですか。
1. 16～17歳　2. 18～19歳　3. 20～24歳　4. 25歳～29歳

問17　初めて献血した場所はどこですか。
1. 高校　2. 大学キャンパス又は専門学校・各種学校
3. 職場　4. 献血バス（1～3以外）
5. 献血ルーム（血液センター）　6. 覚えていない

問18　初めての献血の種類は何ですか。
1. 200mL献血　2. 400mL献血　3. 成分献血　4. 覚えていない

問19　初めての献血で400mL献血をすることをどう思いますか。
1. 特に不安は感じない　2. 不安　3. わからない

2. 不安を選んだ場合の理由

問20　過去1年間に何回献血しましたか。
(1) 200mL献血
1．0回　2．1回　3．2回　4．3回　5．4回　6．5回　7．6回
(2) 400mL献血
1．0回　2．1回　3．2回　4．3回
(3) 成分献血
1．0回　2．1回　3．2回　4．3回　5．4回　6．5回　7．6回　8．7回以上

問21　今までの献血回数は合計で何回ですか。
1．1回　2．2回　3．3～5回　4．6～10回　5．11～20回
6．21～30回　7．それ以上

問22　初めての献血のきっかけになったのは、次のうちどれですか。
きっかけの大きい順に3つまで、その番号をお選びください。
1．自分の血液が役に立ってほしいから
2．献血は愛に根ざしたものだから
3．輸血用の血液が不足していると聞いたから
4．自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから
5．将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力した
6．過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから
7．記念品やグッズがもらえるから
8．お菓子やジュースがもらえるから
9．ネールアートやマッサージなどのサービスが受けられるから
10．図書券がもらえたから
11．なんとなく
12．輸血を受けるときに役立てたいから
13．家族や友人などに勧められたから
14．高校に献血バス・出張献血が来たから
15．大学キャンパスに献血バス・出張献血が来たから
16．覚えていない

1番目 [　]　2番目 [　]　3番目 [　]

問23　現在献血するきっかけになっているのは、次のうちどれですか。
きっかけの大きい順に3つまで、その番号をお選びください。
1．自分の血液が役に立ってほしいから
2．献血は愛に根ざしたものだから
3．輸血用の血液が不足していると聞いたから
4．自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから
5．将来自分や家族などが輸血を受けることがあるかもしれないから協力したい
6．過去に家族や友人などが輸血を受けたことがあるから
7．記念品やグッズがもらえるから
8．お菓子やジュースがもらえるから
9．輸血を受けるときに役立てたいから
10．テレビやDVDを観ることができるから
11．ネールアートやマッサージなどのサービスが受けられるから
12．なんとなく

1番目 [　]　2番目 [　]　3番目 [　]

問24　ご家族が献血している姿を見たことがありますか。
1．ある　2．ない　3．おぼえていない

問25　あなたのお友達に献血をしている人はいますか。
1．いる　2．いない　3．わからない

問26　高校での集団献血があれば、その経験がその後に献血する動機付けになると思いますか。
1．非常に有効　2．どちらかと言えば有効　3．あまり関係ない　4．全く関係ない

問27　献血に関する資料を読まれた後で次の質問にお答え下さい。
画像呈示（資料）

問27-1　献血の必要性への理解は今までと比べ深まりましたか。
1．はい　2．どちらかというとはい　3．どちらかというといいえ　4．いいえ

問27-2　資料を読んで献血に協力する気持ちは高まりましたか。
1．はい　2．どちらかというとはい　3．どちらかというといいえ　4．いいえ

問27-3　アンケートへの記載及び資料を読んで献血に行く回数を増やそうと思いましたか。
1．はい　2．どちらかというとはい　3．どちらかというといいえ　4．いいえ

問28　若い方の献血に協力する気持ちを高めるためには、どのようなことをすればよいと思いますか。
広報の方法やキャンペーン、イベント、献血場所などについて具体的なアイデアやイメージなどがあれば自由に記入してください。

以上で献血に関するアンケートは終了です。御協力ありがとうございました。

わが国は、輸血などの血液製剤を献血により安全に安定して国内自給することを目指している世界でも数少ない国です。
今後とも、献血への御理解と御協力をお願いいたします。

なお、最後に、献血推進キャラクター「けんけつちゃん」をどうぞよろしくお願いします。

プロフィールはこちら → http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/1i.html

献血にご協力を
若い皆さんの熱い友情を

血液を必要とする人すべてが輸血を受けられるように。
献血したことのある方もない方も、あらためてご協力をお願いします。
血液を必要としている人はあなたのすぐそばにいるかもしれません。

? 献血はどこでできるの？

献血は、献血ルームや献血バスで行うことができます。
全国の血液センターや献血ルームは、日本赤十字社ホームページ(http://www.jrc.or.jp)に掲載しています。

? 献血はなぜ必要なの？

血液は様々な働きをしており、生命を維持するために不可欠のものです。そこで事故などで大量に血液が失われた人や、病気で正常な血液を造ることができなくなってしまった人には、血液を補充（輸血）することが必要になります。

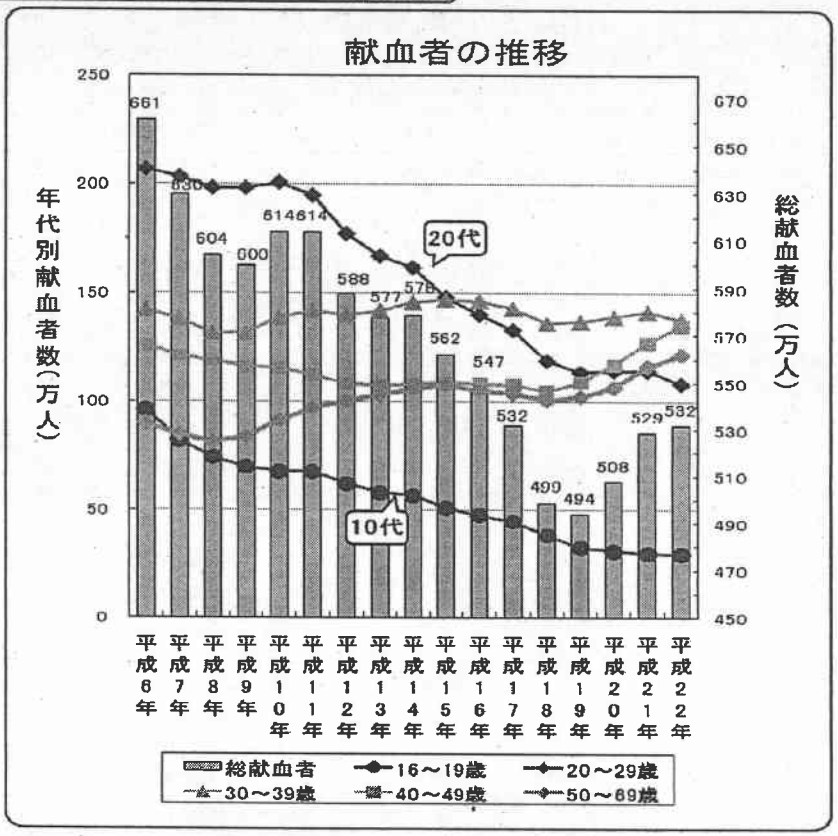
しかし、医療技術の発達した現在でも、血液と全く同じ作用をもつものを人工的に作ることはできません。医療に必要な血液は私たち自身が提供するほかに確保する方法がありません。

献血は、病気やけがで血液を必要としている人のために、見返りを求めず血液を提供することです。健康な人のボランティアによって、多くの人の命が救われているのです。

厚生労働省

お問い合わせ:
厚生労働省医薬食品局血液対策課献血推進係（電話 03-3595-2395）

若年層の献血者が減少しています



現代の医療に欠くことのできない血液。
その血液の確保が徐々に難しくなってきています。

原因の一つは、若年者数自体が少子社会の影響で減少しているほか、若年人口に占める献血者の割合も減少しています。

別の原因として、血液の安全対策の強化も挙げられます。
血液にはウイルスなど病気の原因となるものが潜んでいる可能性があり、献血の前の問診でいくつかの条件に当てはまる方については、献血をご遠慮いただいています。
感染症についての新たな事実が明らかになるにつれ、献血をご遠慮いただかなくてはならない人が増えてきているのです。

このままでは輸血を必要とする方々に血液が届けられないという危機的な状況となる可能性もあります。

献血はひとりひとりの思いやりによって支えられているシステム。皆さんのご協力をお願いします。

資料3

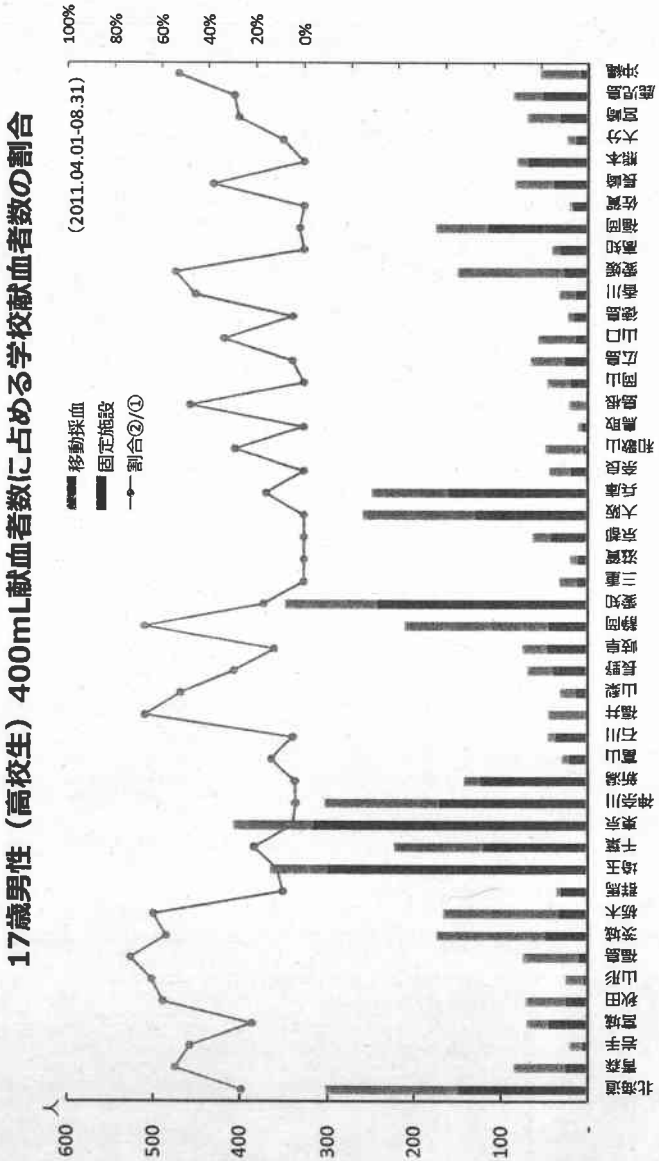
20111122
日本赤十字社血液事業本部

17歳男性400mL献血者数

（平成23年4-8月）

都道府県	全体			高校生のみ				
	固定施設	移動採血	計	固定施設	移動採血	計①	学校献血②	割合②/①
北海道	154	189	343	149	153	302	78	25.8%
青森	27	61	88	26	59	85	46	54.1%
岩手	6	16	22	6	15	21	10	47.6%
宮城	45	25	70	45	25	70	15	21.4%
秋田	25	50	75	25	46	71	42	59.2%
山形	5	21	26	5	20	25	16	64.0%
福島	10	65	75	10	64	74	54	73.0%
茨城	51	124	175	50	123	173	100	57.8%
栃木	39	151	190	34	132	166	105	63.3%
群馬	34	11	45	31	5	36	3	8.3%
埼玉	304	70	374	300	65	365	39	10.7%
千葉	128	117	245	121	101	222	46	20.7%
東京	323	100	423	317	90	407	18	4.4%
神奈川	186	147	333	171	132	303	10	3.3%
新潟	127	23	150	124	18	142	5	3.5%
富山	22	9	31	21	9	30	4	13.3%
石川	37	12	49	37	9	46	2	4.3%
福井	3	42	45	3	42	45	30	66.7%
山梨	13	19	32	13	18	31	16	51.6%
長野	43	31	74	40	29	69	20	29.0%
岐阜	47	45	92	47	28	75	9	12.0%
静岡	48	166	214	45	165	210	141	67.1%
愛知	251	112	363	242	105	347	58	16.7%
三重	13	23	36	12	20	32	-	0.0%
滋賀	11	9	20	11	9	20	-	0.0%
京都	45	25	70	42	21	63	-	0.0%
大阪	137	140	277	129	130	259	-	0.0%
兵庫	172	103	275	160	88	248	39	15.7%
奈良	21	26	47	20	24	44	-	0.0%
和歌山	5	46	51	5	44	49	14	28.6%
鳥取	7	4	11	7	4	11	-	0.0%
島根	3	21	24	3	18	21	10	47.6%
岡山	20	27	47	20	27	47	-	0.0%
広島	27	45	72	27	39	66	3	4.5%
山口	14	44	58	14	43	57	19	33.3%
徳島	16	7	23	16	7	23	1	4.3%
香川	14	27	41	14	19	33	15	45.5%
愛媛	30	129	159	28	122	150	81	54.0%
高知	33	12	45	32	9	41	-	0.0%
福岡	122	72	194	116	59	175	3	1.7%
佐賀	19	3	22	18	3	21	-	0.0%
長崎	43	45	88	40	44	84	32	38.1%
熊本	74	17	91	69	12	81	-	0.0%
大分	17	15	32	14	10	24	2	8.3%
宮崎	34	38	72	33	37	70	19	27.1%
鹿児島	54	37	91	53	33	86	25	29.1%
沖縄	10	54	64	9	46	55	29	52.7%
計	2,869	2,575	5,444	2,754	2,321	5,075	1,159	22.8%

20111122
日本赤十字社血液事業本部



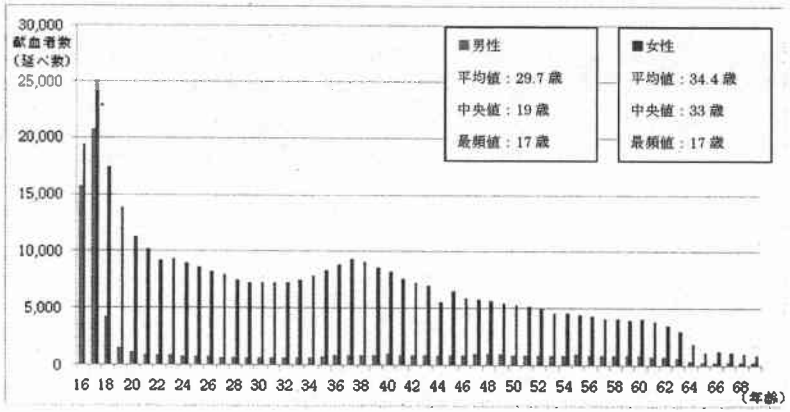
資料４

平成 23 年 11 月 4 日
安全技術調査会提出資料
日本赤十字社血液事業本部

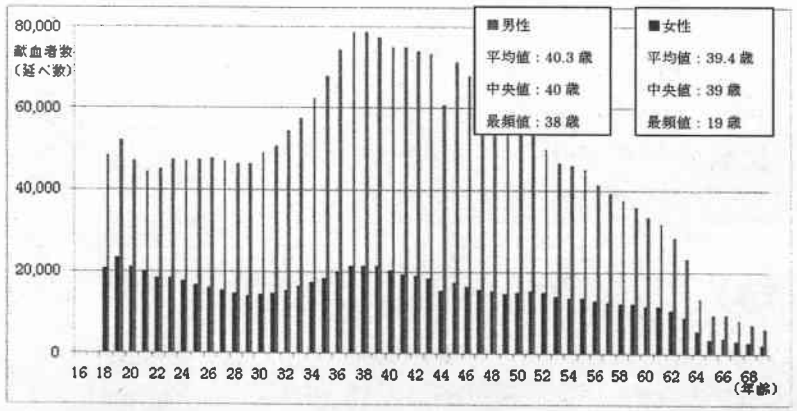
200mL 製剤と 400mL 製剤の安全性について

１．200mL 献血および 400mL 献血における男女別の年齢分布（平成 22 年度）

200mL 献血



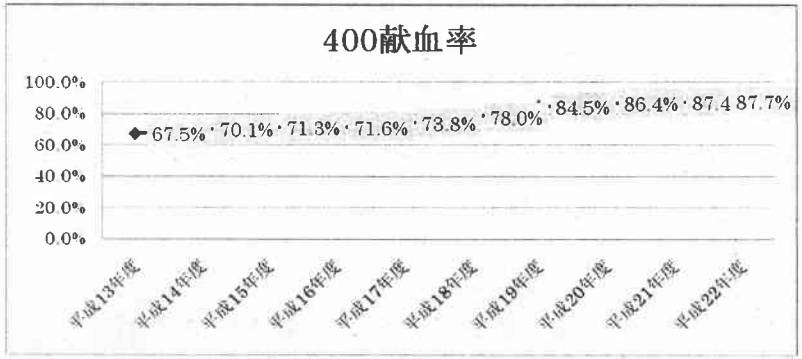
400mL



２．200mL 献血および 400mL 献血における男女別の平均年齢

	献血者総数	比率	平均年齢	中央年齢	最頻年齢
200mL 男性	83,157	2.2 %	29.7	19	17
200mL 女性	379,780	10.1 %	34.4	33	17
200mL　計	462,937	12.3 %	33.6	31	17
400mL 男性	2,532,532	67.2 %	40.3	40	38
400mL 女性	772,287	20.5 %	39.4	39	19
400mL　計	3,304,819	87.7 %	40.1	40	38

３．400mL 献血率の推移



400mL 献血率は医療機関からの発注に応じて増加させてきたが、発注の比率が約 93%（平成 23 年 8 月調査）とすると、未だ需要には応じられていない。

４．初回献血者数の推移と献血総数に対する比率

平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
613,241	557,871	554,175	547,846	545,880
12.3 %	11.3 %	10.9 %	10.4 %	10.3 %

5．感染症マーカーにおける年齢別の検査陽性率

調査期間：平成 20 年 8 月～平成 23 年 7 月（3 年間）

1）200mL 献血　【1000 人当り】

	男性			女性			男女計		
	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体
10 歳代	1.080	0.280	0.404	0.749	0.210	0.534	0.867	0.235	0.488
20 歳代	1.191	1.377	0.818	0.930	0.674	0.469	0.953	0.737	0.500
30 歳代	1.523	2.704	0.495	1.064	1.266	0.603	1.107	1.402	0.593
40 歳代	1.404	4.376	1.372	1.067	2.522	0.653	1.114	2.781	0.754
50 歳代	1.958	8.258	1.273	1.452	5.965	0.951	1.546	6.387	1.010
60 歳代	1.279	9.258	1.035	0.914	5.628	1.135	0.989	6.375	1.115
計	1.297	2.701	0.722	1.009	1.935	0.637	1.062	2.075	0.653

2）400mL 献血　【1000 人当り】

	男性			女性			男女計		
	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体
10 歳代	0.856	0.364	0.509	0.830	0.337	0.572	0.849	0.356	0.528
20 歳代	0.966	0.735	0.484	0.891	0.658	0.567	0.946	0.715	0.506
30 歳代	1.121	1.430	0.642	1.095	1.380	0.658	1.115	1.419	0.645
40 歳代	1.042	2.580	0.879	1.224	2.986	0.907	1.078	2.660	0.884
50 歳代	1.226	5.314	1.053	1.341	6.334	1.102	1.252	5.550	1.064
60 歳代	1.008	6.082	0.925	0.922	5.965	1.152	0.984	6.050	0.987
計	1.071	2.544	0.761	1.091	2.751	0.805	1.076	2.592	0.771

- 献血種類別の平均年齢（200mL：33.6 歳、400mL ：40.1 歳）あるいは中央年齢（200mL：31 歳、400mL ：40 歳）における検査陽性率は、HBc 抗体検査を除いて大きな差はない。
- 陽性血液は廃棄されるが、検査をすり抜けるリスクは、検査陽性率に比例すると仮定すると、200m L 及び 400m L の感染リスクには大きな差は無い。
  少なくとも 2 倍の差はないので、400mL 製剤 1 本と同量の 200mL 製剤 2 本を比較すると、200mL 製剤 2 本の方がリスクは高くなる。

6．初回献血者の検査陽性率

【1000 人当り】

	HBs 抗原	HBc 抗体	HCV 抗体
200mL 献血	1.53	3.11	1.01
400mL 献血	2.87	6.40	2.10

- 初回献血者の感染率は、献血で選別されていない状況であり、日本人の真の感染率と考えられるが、献血者全体に比して、初回献血者の陽性率は高い。
- 陽性率を比較した場合、200mL は 400mL の約 1/2 である。
- 初回献血者の比率は約 10%であり、これが 200mL と 400mL 由来血液全体の安全性の比較に大きな影響は与えていない（前記 5.「感染症マーカーにおける年齢別の検査陽性数」より）。

7．HBV ウインドウ期の感染例から見たリスク比較

20 プール NAT 以降に採血された輸血用血液製剤による感染例

	女性		女性計	男性		男性計	計
	400mL	成分	400mL+成分	400mL	成分	400mL+成分	
20 歳代	1	0	1	3	2	5	6
30 歳代	0	0	0	6	3	9	9
40 歳代	0	0	0	3	7	10	10
50 歳代	0	0	0	1	0	1	1
計	1	0	1	13	12	25	26

＊200mL 採血由来による感染例はない。

- 輸血後感染と考えられた血液の献血者の年齢は、20 歳代から 40 歳代に集中している。
- 200mL の献血比率は、全血献血全体の約 12%と低いこと、また感染症例自体の数が少ないこともあり、200mL 採血による感染症例はない。
- 200mL と 400mL の血液量による差も考慮の対象になるが、同じ感染血液由来の血漿製剤と赤血球製剤による感染に差はなく*)、赤血球製剤中の残存血漿量は、採血量の 10%程度であり、200mL と 400mL の差による影響はあっても小さいものと思われる。
- 感染症例数が少なく HBV ウインドウ期の血液による感染症例から、200mL と 400mL 由来製剤の感染リスクを評価することは難しい。
- なお、HBV 感染既往による感染リスクは、今後の安全対策として HBc 抗体のスクリーニング基準を COI≧1.0 と設定した場合には、リスクは極めて少なくなると推察される。

*) Satake M, et al. Infectivity of blood components with low hepatitis B virus DNA levels identified in a lookback program. TRASFUSION 2007;47:1197-1205

８．遡及調査で個別 NAT 陽性となった製剤の採血種別から見たリスク比較

年度	件数	赤血球製剤		血小板製剤	血漿製剤	計
		200mL	400mL			
2008	94	2	69	2	21	94
2009	144	21	80	8	30	139
2010	100	5	72	4	17	98
計	338	28 (11.3%)	221 (88.7%)	14	68	331

- 遡及調査により個別 NAT 陽性となった血液は、輸血に使用される前であれば回収される。遡及調査前に輸血に使用されてしまう場合もあるのでリスクを比較した。
- ウインドウ期と感染既往の全体で見ると、200m L と 400m L での遡及調査で個別 NAT 陽性となったのは 28（11.3%）：221（88.7%）であり、200m L と 400m L の供給比率（400mL 比率：87.7%）と同程度であることから、両者に個別 NAT 陽性となる比率で差はないと思われる。

９．「呼吸困難」等の重篤な輸血副作用の発生状況から見たリスク比較

1）輸血副作用件数（2010 年）

件数	200mL		400mL		血小板製剤等
679	22（3.2%）		273（40.2%）		384(56.6%)
	赤血球製剤	血漿製剤	赤血球製剤	血漿製剤	
	19	3	210	63	

2）200mL と 400mL 単独輸血製剤別の症例報告数とその頻度

	赤血球製剤 症例報告数	供給本数	症例報告頻度 (10,000 本当り)	血漿製剤 症例報告数	供給本数	症例報告頻度 (10,000 本当り)
200mL	19	427,517	0.44	3	61,956	0.48
400mL	210	3,006,858	0.70	63	733,722	0.86

- 重篤な輸血副作用の報告件数から 200mL と 400mL で症例報告頻度を比較すると、200mL の方が低い傾向が見られた。
- 輸血関連急性肺障害（TRALI）予防対策のために、400mL 由来の血漿製剤は男性由来血漿を優先的に製造している。2011 年 8 月の血漿製剤製造状況（本数）では、200mL が男性比率 14.6%（679 / 4,661）に対し、400mL の男性比率は 99.6%（62,814 / 63,060）である。TRALI のリスクにおいては、400mL 由来がリスクは低いと考えられる。

１０．結論

以上の結果から、200mL 製剤は 400mL 製剤とほぼ同等のリスクであり、200mL を 400 mL と同量の 2 本を輸血した場合の相対的感染リスクは、ほぼ 2 倍となるが HBV,HCV,HIV の感染リスクは極めて低いものである。

資料5

20111122
日本赤十字社血液事業本部

200mL 全血採血のあり方に関する資料

条件		(1) 400mL 献血を推進し、初回の若年層を対象として 200mL 献血を制限した場合（血漿と赤血球をいずれも使用）	(2) 若年層全体で 200mL 献血を推進し、血漿のみを使用し、赤血球は輸血用血液として使用しない場合。	(3) 若年層全体で 200mL 献血を推進し、200mL 献血由来赤血球×2 本の供給を推進した場合（血漿と赤血球をいずれも使用）	(4) 若年層（特に高校生）の初回献血者のみを対象に 200mL 献血を推進し、初回の若年層以外の 200mL 献血の制限を許容した場合（血漿と赤血球をいずれも使用）
評価項目	献血者の理解	初回の若年層を対象に献血制限することから、将来に亘る継続的な献血者確保に繋がらない。 ×	赤血球を輸血用血液として使用しない（未使用と分かっていながら採血する）ことに、理解が得られるか。 △	将来の献血基盤となる若年層のみならず、献血全体の理解が得られやすくなるものと考えられる。 ○	将来の献血基盤となる若年層については、理解が得られるが、初回の若年層以外の献血者を制限することに理解が得られるか。 △
	献血者の確保	中長期的には、200mL 献血を含めた若年層の献血推進に課題が残る。 ×	献血者の理解が得られれば、中長期的には、200mL 献血も含めた若年層の献血推進がより可能となる。 △ 200mL 献血の血漿のみ使用することから、血漿成分献血を制限する必要がある。	中長期的には、200mL 献血を含めた若年層の献血推進がより可能となる。 ○	中長期的には、200mL 献血を含めた若年層の献血推進がより可能となる。 ○
	血液センターの負担	400mL 献血者数は増加するが、200mL 献血者数がそれ以上に減少するため、材料費、経費等のコスト減となる。 ○	血漿成分献血者数は減少となるが、200mL 献血者数、400mL 献血者数がそれ以上に増加するため、材料費、経費等のコスト増となる。 ×	200mL 献血者数が増加することから、材料費・経費等のコスト増となる。 ×	200mL 献血者数全体は変わらないため、材料費・経費等のコストは変わらない。 △
	輸血患者の負担	医療機関からの 400mL 献血由来製剤の需要により近づけることができ、感染リスクは軽減し、負担は軽減されるものと考えられる。 ○	医療機関からの 400mL 献血由来製剤の需要により近づけることができ、感染リスクは軽減し、負担は軽減されるものと考えられる。 ○	200mL 献血由来製剤の供給が増加することにより、感染リスクが高くなることから、負担は増加するものと考えられる。 ×	200mL 献血由来製剤の供給量は変わらないため、感染リスクは変化なく、負担は変わらない。 △
	医療機関の負担	輸血検査や輸血セット等に係るコストや手技的な負担は軽減されるものと考えられる。 ○	輸血検査や輸血セット等に係るコストや手技的な負担は軽減されるものと考えられる。 ○	輸血検査や輸血セット等に係るコストや手技的な負担は増加するものと考えられる。 ×	輸血検査や輸血セット等に係るコストや手技的な負担は変わらない。 △
条件を満たすための対応と全血献血者数（推定） ⇩ *以下の 22 年度献血実績を基に各条件の献血者数の推定を行っている。 200mL 462,937 人（12.3%） 400mL 3,304,819 人（87.7%） 計 3,767,756 人		若年層の 200mL 献血（初回）者数（22 年度） 単位:人 年代 / 男性 / 女性 / 計 16-19 歳 / 28,610 / 46,383 / 74,993 20-29 歳 / 3,616 / 24,366 / 27,982 計 / 32,226 / 70,749 / 102,975 *200mL 献血 103,000 人を制限対象とし、減少分を 400mL 献血で確保する。	*200mL 献血は、右記（3）と同様に 547,000 人の確保が可能と推定される。 *400mL 献血は左記（1）と同数を確保する。 *200mL 献血の 547,000 人-360,000 人=187,000 人については、血漿のみ使用することから、血漿成分献血者数 49,000 人を制限することになる。	*右記（4）の 200mL 献血で 48,000 人の確保に加え、特に 200mL 献血者数の制限による減少傾向がみられる 20 代女性を対象として推進した場合、さらに 36,000 人の献血者確保が可能と推定される。 *400mL 献血 42,000 人が制限対象となる。	高校献血実施状況（22 年度） 単位:人 200mL / 400mL / 計 / 実施率 40,871 / 21,863 / 46,383 / 23.4% *実施率を 50%とした場合とし、初回献血率は 56.1%(10 代)であるため、200mL 献血で 48,000 人の確保が可能と推定される。 *初回若年層以外の 200mL 献血 48,000 人が制限対象となる。
		200mL 献血 360,000 人（9.7%） 400mL 献血 3,357,000 人（90.3%） 計 3,717,000 人	200mL 献血 547,000 人（14.0%） 400mL 献血 3,357,000 人（86.0%） 計 3,904,000 人	200mL 献血 547,000 人（14.4%） 400mL 献血 3,263,000 人（85.6%） 計 3,810,000 人	200mL 献血 463,000 人（12.3%） 400mL 献血 3,305,000 人（87.7%） 計 3,768,000 人

資料６－１

平成２４年度の献血の推進に関する計画（案）

平成２４年　月　日

厚生労働省告示第　号

目次

前文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１節　平成２４年度に献血により確保すべき血液の目標量・・・・・・・・・1

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項・・・・・・1

１　献血に関する普及啓発活動の実施・・・・・・・・・・・・・・1

（１）　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進

（２）　献血運動推進全国大会の開催等

（３）　献血推進運動中央連絡協議会の開催

（４）　献血推進協議会の活用

（５）　その他関係者による取組

２　献血者が安心して献血できる環境の整備・・・・・・・・・・5

第３節　その他献血の推進に関する重要事項・・・・・・・・・・・・・・・・5

１　献血の推進に際し、考慮すべき事項・・・・・・・・・・・・5

（１）　血液検査による健康管理サービスの充実

（２）　献血者の利便性の向上

（３）　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進

（４）　採血基準の在り方の検討

（５）　まれな血液型の血液の確保

２　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応・・・・6

３　災害時等における献血の確保等・・・・・・・・・・・・・・・6

４　献血推進施策の進捗状況等に関する確認と評価・・・・・・7

平成２４年度の献血の推進に関する計画

前文

・　本計画は、安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律（昭和３１年法律第１６０号）第１０条第１項の規定に基づき定める平成２４年度の献血の推進に関する計画であり、血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針（平成２０年厚生労働省告示第３２６号）に基づくものである。

第１節　平成２４年度に献血により確保すべき血液の目標量

・　平成２４年度に必要と見込まれる輸血用血液製剤の量は、全血製剤○万リットル、赤血球製剤○万リットル、血漿（しょう）製剤○万リットル、血小板製剤○万リットルであり、それぞれ○万リットル、○万リットル、○万リットル、○万リットルが製造される見込みである。

・　さらに、確保されるべき原料血漿（しょう）の量の目標を勘案すると、平成２４年度には、全血採血による○万リットル及び成分採血による○万リットル（血漿（しょう）採血○万リットル及び血小板採血○万リットル）の計○万リットルの血液を献血により確保する必要がある。

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項

前年度までの献血の実施状況とその評価を踏まえ、平成２４年度の献血推進計画における具体的な措置を以下のように定める。

１　献血に関する普及啓発活動の実施

・　国は、都道府県、市町村（特別区を含む。以下同じ。）、採血事業者等の関係者の協力を得て、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の安定供給を確保し、その国内自給を推進するとともに、広く国民に対し、治療に必要な血液製剤の確保が相互扶助と博愛精神による自発的な献血によって支えられていることや、血液製剤の適正使用が求められていること等を含め、献血や血液製剤について国民に正確な情報を伝え、その理解と献血への協力を求めるため、教育及び啓発を行う。

・　都道府県及び市町村は、国、採血事業者等の関係者の協力を得て、より多くの住民の献血への参加を促進するため、対象となる年齢層や地域の実情に応じた啓発、献血推進組織の育成等を行うことにより、献血への関心を高めることが必要である。

・　採血事業者は、国、都道府県、市町村等の関係者の協力を得て、献血者の安全性に配慮するとともに、継続して献血に協力できる環境の整備を行うことが重要である。

このため、国、都道府県、市町村等の関係者と協力して効果的なキャンペーンを実施すること等により、献血や血液製剤に関する一層の理解と献血への協力を呼びかけることが求められる。

・　国、都道府県、市町村、採血事業者及び医療関係者は、国民に対し、病気や怪我のために輸血を受けた患者や、その家族の声を伝えること等により、血液製剤がこれを必要とする患者への医療に欠くことのできない有限で貴重なものであることを含め、献血の正しい知識や必要性、血液製剤についての普及啓発を実施し、又はこれに協力することが必要である。また、少子高齢社会の進行による血液製剤を必要とする患者の増加や献血可能人口の減少、血液製剤の利用実態等について正確な情報を伝え、献血者等の意見を踏まえつつ、これらの情報提供や普及啓発の手法等の改善に努めることが必要である。さらに、血液製剤の安全性の確保のための取組の一環として、感染症の検査を目的とした献血を行わないよう、献血における本人確認や問診の徹底はもとより、平素から様々な広報手段を用いて、国民に周知徹底する必要がある。

・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、平成２２年１月２７日に実施された英国滞在歴による献血制限の見直し及び平成２３年４月１日に施行された採血基準の改正について、国民に対して十分に広報を行い、献血への協力を求める必要がある。

・　これらを踏まえ、以下に掲げる献血推進のための施策を実施する。

①　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進

血液製剤について、国内自給が確保されることを基本としつつ、将来にわたって安定的に供給される体制を維持するため、幼少期も含めた若年層、企業・団体、複数回献血者に対して、普及啓発の対象を明確にした効果的な活動や重点的な献血者募集を実施し、以下の取組を行う。

＜若年層を対象とした対策＞

・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得るとともに、機能的な連携を図ることにより、若年層の献血や血液製剤に関する理解の促進及び献血体験の促進に組織的に取り組む。また、若年層への啓発には、若年層向けの雑誌、放送媒体、インターネット等を含む様々な広報手段を用いて気軽に目に触れる機会を増やすとともに、献血の行動へと繋げるため、学生献血推進ボランティア等の同世代からの働きかけや、献血についての広告に国が作成した献血推進キャラクターを活用する等、実効性のある取組が必要である。特に１０代層への啓発には、採血基準の改正により、男性に限り４００ミリリットル全血採血が１７歳から可能となったこと等について情報を伝え、献血者の協力を得る。さらに、子が幼少期にある親子に対し、血液の大切さや助け合いの心について、親子向けの雑誌等の広報手段や血液センター等を活用して啓発を行うとともに、親から子へ献血や血液製剤の意義を伝えることが重要であることから、地域の特性に応じて採血所に託児体制を確保する等、親子が献血に触れ合う機会を設ける。

・　国は、高校生を対象とした献血や血液製剤について解説した教材や中学生を対

象とした血液への理解を促すポスターを作成し、都道府県、市町村及び採血事業者と協力して、これらの教材等を活用しながら、献血や血液製剤に関する理解を深めるための普及啓発を行う。

・　都道府県及び市町村は、地域の実情に応じて、若年層の献血への関心を高めるため、学校等において、ボランティア活動推進の観点を踏まえつつ献血や血液製剤についての情報提供を行うとともに、献血推進活動を行うボランティア組織との有機的な連携を確保する。

・　採血事業者は、その人材や施設を活用し、若年層へ献血の意義や血液製剤について分かりやすく説明する「献血セミナー」や血液センター等での体験学習を積極的に行い、正しい知識の普及啓発と協力の確保を図る。その推進に当たっては、国と連携するとともに、都道府県、市町村及び献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得る。

・　採血事業者は、国及び都道府県の協力を得て、学生献血推進ボランティアとの更なる連携を図り、大学等における献血の推進を促すとともに、将来、医療従事者になろうとする者に対して、多くの国民の献血によって医療が支えられている事実や血液製剤の適正使用の重要性への理解を深めてもらうための取組を行う。

＜５０～６０歳代を対象とした対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、年齢別人口に占める献血者の率が低い傾向にある５０～６０歳代の層に対し、血液製剤の利用実態や献血可能年齢等について正確な情報を伝え、相互扶助の観点からの啓発を行い、献血者の増加を図る。また、血小板成分採血について、採血基準の改正により、男性に限り６９歳まで（６５歳から６９歳までの者については、６０歳から６４歳までの間に献血の経験がある者に限る。）可能となったことについて情報を伝え、献血者の確保を図る。

＜企業等における献血の推進対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、献血に協賛する企業や団体を募り、その社会貢献活動の一つとして、企業等における献血の推進を促す。また、血液センター等における献血推進活動の展開に際し、地域の実情に即した方法で企業等との連携強化を図り、企業等における献血の推進を図るための呼びかけを行う。

＜複数回献血者対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、複数回献血者の協力が十分に得られるよう、平素から血液センターに登録された献血者に対し、機動的かつ効率的に呼びかけを行う体制を構築する。また、献血に継続的に協力が得られている複数回献血者の組織化及びサービスの向上を図り、その増加に取り組むとともに、献血の普及啓発活動に協力が得られるよう取り組む。

＜献血推進キャンペーン等の実施＞

・　国は、献血量を確保しやすくするとともに、感染症等のリスクを低減させる等の利点がある４００ミリリットル全血採血並びに成分採血の推進及び普及のため、都道府県及び採血事業者とともに、７月に「愛の血液助け合い運動」を、１月及び２月に「はたちの献血」キャンペーンを実施するほか、血液の供給状況に応じて献血推進キャンペーン活動を緊急的に実施する。また、様々な広報手段を用いて献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を呼びかけるとともに、献血場所を確保するため、関係者に必要な協力を求める。

・　都道府県、市町村及び採血事業者においても、これらの献血推進活動を実施することが重要である。また、市町村においては、地域における催物の機会等を活用する等、積極的に取り組むことが望ましい。

②　献血運動推進全国大会の開催等

・　国は、都道府県及び採血事業者とともに、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の国内自給を推進し、広く国民に献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を求めるため、７月に献血運動推進全国大会を開催するとともに、その広報に努める。また、国及び都道府県は、献血運動の推進に関し積極的に協力し、模範となる実績を示した団体又は個人に対し表彰を行う。

③　献血推進運動中央連絡協議会の開催

・　国は、都道府県、市町村、採血事業者、献血推進活動を行うボランティア組織、患者団体等の代表者の参加を得て、効果的な献血推進のための方策や献血を推進する上での課題等について協議を行うため、献血推進運動中央連絡協議会を開催する。

④　献血推進協議会の活用

・　都道府県は、献血や血液製剤に関する住民の理解と献血への協力を求め、血液事業の適正な運営を確保するため、採血事業者、医療関係者、商工会議所、教育機関、報道機関等から幅広く参加者を募って、献血推進協議会を設置し、定期的に開催することが求められる。市町村においても、同様の協議会を設置することが望ましい。

・　都道府県及び市町村は、献血推進協議会を活用し、採血事業者及び血液事業に関わる民間組織等と連携して、都道府県献血推進計画の策定のほか、献血や血液製剤に関する教育及び啓発を検討するとともに、民間の献血推進組織の育成等を行うことが望ましい。

⑤　その他関係者による取組

・　官公庁、企業、医療関係団体等は、その構成員に対し、ボランティア活動である献血に対し積極的に協力を呼びかけるとともに、献血のための休暇取得を容易

にするよう配慮する等、進んで献血しやすい環境作りを推進することが望ましい。

2　献血者が安心して献血できる環境の整備

・　採血事業者は、献血の受入れに当たっては献血者に不快の念を与えないよう、丁寧な処遇をすることに特に留意し、献血者の要望を把握するとともに、採血後の休憩スペースを十分に確保する等、献血受入体制の改善に努める。また、献血者の個人情報を保護するとともに、国の適切な関与の下で献血による健康被害に対する補償のための措置を実施する等、献血者が安心して献血できる環境整備を行う。

・　採血事業者は、特に初回献血者が抱いている不安等を払拭するため、採血の手順や採血後の過ごし方等について、映像やリーフレット等を活用した事前説明を十分に行い、献血者の安全確保を図る。

・　採血事業者は、採血所における地域の特性に合わせたイメージ作りや移動採血車の外観の見直し等、なお一層のイメージアップを図り、献血者の増加を図る。

・　国及び都道府県は、採血事業者によるこれらの取組を支援することが重要である。

第３節　その他献血の推進に関する重要事項

1　献血の推進に際し、考慮すべき事項

①　血液検査による健康管理サービスの充実

・　採血事業者は、献血制度の健全な発展を図るため、採血に際して献血者の健康管理に資する検査を行い、献血者の希望を確認してその結果を通知する。また、低色素により献血ができなかった献血申込者に対して、栄養士による健康相談を実施し、献血者の増加を図る。

・　国は、採血事業者によるこれらの取組を支援する。また、献血者の健康管理に資する検査の充実は献血の推進に有効であることから、本人の同意の上、検査結果を健康診査、人間ドック、職域検査等で活用するとともに、地域における保健指導にも用いることができるよう、周知又は必要な指導を行う。

・　都道府県及び市町村は、これらの取組に協力する。

②　献血者の利便性の向上

・　採血事業者は、安全性に配慮しつつ、効率的に採血を行うため、立地条件等を考慮した採血所の設置、地域の実情に応じた移動採血車による計画的採血等、献血者の利便性及び安全で安心な献血に配慮した献血受入体制の整備及び充実を図る。

・　都道府県及び市町村は、採血事業者と十分協議して移動採血車による採血等の日程を設定し、そのための公共施設の提供等、採血事業者の献血の受入れに協力することが重要である。また、採血事業者とともに献血実施の日時や場所等について、国民に対して献血への協力が得られるよう、十分な広報を行う必要がある。

③　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進

・　国は、「輸血医療の安全性確保のための総合対策」に基づき、採血事業者と連携

し、献血者に対する健康管理サービスの充実等による健康な献血者の確保、献血者の本人確認の徹底等の検査目的の献血の防止のための措置を講ずる等、善意の献血者の協力を得て、血液製剤の安全性を向上するための対策を推進する。

④　採血基準の在り方の検討

・　国は、献血者の健康保護を第一に考慮しつつ、献血の推進及び血液の有効利用の観点から、採血基準の見直しの検討を行う。

⑤　まれな血液型の血液の確保

・　採血事業者は、まれな血液型を持つ患者に対する血液製剤の供給を確保するため、まれな血液型を持つ者に対し、その意向を踏まえ、登録を依頼する。

・　国は、まれな血液型の血液の供給状況について調査する。

⑥　２００ミリリットル全血採血の在り方について

・　国、都道府県、市町村および採血事業者は、医療機関からの需要、血液製剤の安全性、製造効率の観点から、献血を推進する上では、４００ミリリットル全血採血を基本として行うものとする。

・　しかしながら、今後の献血推進という観点からは、若年層の献血推進が非常に重要であることから、４００ミリリットル全血採血ができない若年層に対しては、学校と連携して「献血セミナー」を実施する等、献血の知識について啓発する取組を積極的に行う。また、２００ミリリットル全血採血については、将来の献血基盤となる若年層の初回献血を中心に推進するものとする。

2　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応

・　国、都道府県及び採血事業者は、赤血球製剤等の在庫水準を常時把握し、在庫が不足する場合又は不足が予測される場合には、その供給に支障を及ぼす危険性を勘案し、国及び採血事業者が策定した対応マニュアルに基づき、早急に所要の対策を講ずることが重要である。

3　災害時等における献血の確保等

・　国、都道府県及び市町村は、災害時等において献血が確保されるよう、採血事業者と連携して必要とされる献血量を把握した上で、様々な広報手段を用いて、需要に見合った広域的な献血の確保を行うとともに、製造販売業者等の関係者と連携し、献血により得られた血液が円滑に現場に供給されるよう措置を講ずることが必要である。また、採血事業者は、災害時における献血受入体制を構築し、広域的な需給調整等の手順を定め、国、都道府県及び市町村と連携して対応できるよう備えることにより、災害時における献血の受入れに協力する。

・　今般の東日本大震災により、東北地方の一部の地域（宮城県、福島県、岩手県）で献血受入ができない環境となったが、全国の被災していない地域において被災地域の需要分を加えた献血血液を確保し、医療機関のニーズに合わせて血液製剤を安定的に供給した。今後も、献血確保に支障をきたさないよう、全国的に継続的な献

血推進を図っていくことが重要である。

・　さらに、東日本大震災の際には、停電や一般電話回線（携帯回線を含む）の輻輳により通信手段の確保に困難が生じ、また、震災による精油所の被災や燃料の流通にも支障が生じたことにより、移動採血車等の燃料の確保が困難であったことから、国、都道府県、市町村及び採血事業者は、災害時等に備えた複数の通信手段の確保や燃料の確保が的確に行われるよう対策を講ずる必要がある。

4　献血推進施策の進捗状況等に関する確認と評価

・　国、都道府県及び市町村は、献血推進のための施策の短期的又は長期的な効果及び進捗状況並びに採血事業者による献血の受入れの実績を確認し、その評価を次年度の献血推進計画等の作成に当たり参考とする。また、必要に応じ、献血推進のための施策を見直すことが必要である。

・　国は、献血推進運動中央連絡協議会等の機会を活用し、献血の推進及び受入れに関し関係者の協力を求める必要性について献血推進活動を行うボランティア組織と認識を共有し、必要な措置を講ずる。

・　採血事業者は、献血の受入れに関する実績、体制等の評価を行い、献血の推進に活用する。

資料６－２

献血推進計画 新旧対照表

平成２４年度献血推進計画（案）	平成２３年度献血推進計画
前文 ・　本計画は、安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律（昭和３１年法律第１６０号）第１０条第１項の規定に基づき定める平成２４年度の献血の推進に関する計画であり、血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針（平成２０年厚生労働省告示第３２６号）に基づくものである。	**前文** ・　本計画は、安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律（昭和３１年法律第１６０号）第１０条第１項の規定に基づき定める平成２３年度の献血の推進に関する計画であり、血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針（平成２０年厚生労働省告示第３２６号）に基づくものである。
第１節　平成２４年度に献血により確保すべき血液の目標量 ・　平成２４年度に必要と見込まれる輸血用血液製剤の量は、全血製剤○万リットル、赤血球製剤○万リットル、血漿製剤○万リットル、血小板製剤○万リットルであり、それぞれ○万リットル、○万リットル、○万リットル、○万リットルが製造される見込みである。 ・　さらに、確保されるべき原料血漿の量の目標を勘案すると、平成２４年度には、全血採血による○万リットル及び成分採血による○万リットル（血漿採血○万リットル及び血小板採血○万リットル）の計○万リットルの血液を献血により確保する必要がある。	**第１節　平成２３年度に献血により確保すべき血液の目標量** ・　平成２３年度に必要と見込まれる輸血用血液製剤の量は、全血製剤０．０２万リットル、赤血球製剤５４万リットル、血漿製剤２７万リットル、血小板製剤１７万リットルであり、それぞれ０．０２万リットル、５４万リットル、２７万リットル、１７万リットルが製造される見込みである。 ・　さらに、確保されるべき原料血漿の量の目標を勘案すると、平成２３年度には、全血採血による１４５万リットル及び成分採血による６２万リットル（血漿採血２７万リットル及び血小板採血３５万リットル）の計２０７万リットルの血液を献血により確保する必要がある。

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項 前年度までの献血の実施状況とその評価を踏まえ、平成２４年度の献血推進計画における具体的な措置を以下のように定める。 **１　献血に関する普及啓発活動の実施** ・　国は、都道府県、市町村（特別区を含む。以下同じ。）、採血事業者等の関係者の協力を得て、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の安定供給を確保し、その国内自給を推進するとともに、広く国民に対し、治療に必要な血液製剤の確保が相互扶助と博愛精神による自発的な献血によって支えられていることや、血液製剤の適正使用が求められていること等を含め、献血や血液製剤について国民に正確な情報を伝え、その理解と献血への協力を求めるため、教育及び啓発を行う。 ・　都道府県及び市町村は、国、採血事業者等の関係者の協力を得て、より多くの住民の献血への参加を促進するため、対象となる年齢層や地域の実情に応じた啓発及び献血推進組織の育成等を行うことにより、献血への関心を高めることが必要である。 ・　採血事業者は、国、都道府県、市町村等の関係者の協力を得て、献血者の安全性に配慮するとともに、継続して献血に協力できる環境の整備を行うことが重要である。このため、国、都道府県、市町村等の関係者と協力して効果的なキャンペーンを実施すること等により、献血や血液製剤に関する一層の理解と献血への協力を呼びかけることが求められる。	**第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項** 前年度までの献血の実施状況とその評価を踏まえ、平成２３年度の献血推進計画における具体的な措置を以下のように定める。 **１　献血に関する普及啓発活動の実施** ・　国は、都道府県、市町村（特別区を含む。以下同じ。）、採血事業者等の関係者の協力を得て、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の安定供給を確保し、その国内自給を推進するとともに、広く国民に対し、治療に必要な血液製剤の確保が相互扶助と博愛精神による自発的な献血によって支えられていることや、血液製剤の適正使用が求められていること等を含め、献血や血液製剤について国民に正確な情報を伝え、その理解と献血への協力を求めるため、教育及び啓発を行う。 ・　都道府県及び市町村は、国、採血事業者等の関係者の協力を得て、より多くの住民の献血への参加を促進するため、対象となる年齢層や地域の実情に応じた啓発及び献血推進組織の育成等を行うことにより、献血への関心を高めることが必要である。 ・　採血事業者は、国、都道府県、市町村等の関係者の協力を得て、献血者の安全性に配慮するとともに、継続して献血に協力できる環境の整備を行うことが重要である。このため、国、都道府県、市町村等の関係者と協力して効果的なキャンペーンを実施すること等により、献血や血液製剤に関する一層の理解と献血への協力を呼びかけることが求められる。

・　国、都道府県、市町村、採血事業者及び医療関係者は、国民に対し、病気や怪我のために輸血を受けた患者や、その家族の声を伝えること等により、血液製剤がこれを必要とする患者への医療に欠くことのできない有限で貴重なものであることを含め、献血の正しい知識や必要性、血液製剤についての普及啓発を実施し、又はこれに協力することが必要である。また、少子高齢社会の進行による血液製剤を必要とする患者の増加や献血可能人口の減少、血液製剤の利用実態等について正確な情報を伝え、献血者等の意見を踏まえつつ、これらの情報提供や普及啓発の手法等の改善に努めることが必要である。さらに、血液製剤の安全性の確保のための取組の一環として、感染症の検査を目的とした献血を行わないよう、献血における本人確認や問診の徹底はもとより、平素から様々な広報手段を用いて、国民に周知徹底する必要がある。 ・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、平成２２年１月２７日に実施された英国滞在歴による献血制限の見直し及び平成２３年４月１日に施行された採血基準の改正について、国民に対して十分に広報を行い、献血への協力を求める必要がある。 ・　これらを踏まえ、以下に掲げる献血推進のための施策を実施する。 **①　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進** 血液製剤について、国内自給が確保されることを基本としつつ、将来にわたって安定的に供給される体制を維持するため、幼少期も含めた若年層、企業・団体、複数回献血者に対して、普及啓発の対象を明確にした効果的な活動や重点的な献血者募集を実施し、以下の取組を行う。	・　国、都道府県、市町村、採血事業者及び医療関係者は、国民に対し、病気や怪我のために輸血を受けた患者や、その家族の声を伝えること等により、血液製剤がこれを必要とする患者への医療に欠くことのできない有限で貴重なものであることを含め、献血や血液製剤についての普及啓発を実施し、又はこれに協力することが必要である。また、少子高齢化の進行による血液製剤を必要とする患者の増加や献血可能人口の減少、血液製剤の利用実態等について正確な情報を伝え、献血者等の意見を踏まえつつ、これらの情報提供や普及啓発の手法等の改善に努めることが必要である。さらに、血液製剤の安全性の確保のための取組の一環として、感染症の検査を目的とした献血を行わないよう、献血における本人確認や問診の徹底はもとより、平素から様々な広報手段を用いて、国民に周知徹底する必要がある。 ・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、平成２２年１月２７日に実施された英国滞在歴による献血制限の見直し及び平成２３年４月１日に施行される採血基準の改正について、国民に対して十分に広報を行い、献血への協力を求める必要がある。 ・　これらを踏まえ、以下に掲げる献血推進のための施策を実施する。 **①　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進** 血液製剤について、国内自給が確保されることを基本としつつ、将来にわたって安定的に供給される体制を維持するため、幼少期も含めた若年層、企業・団体、複数回献血者に対して、普及啓発の対象を明確にした効果的な活動や重点的な献血者募集を実施し、以下の取組を行う。

＜若年層を対象とした対策＞ ・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得るとともに、機能的な連携を図ることにより、若年層の献血や血液製剤に関する理解の促進及び献血体験の促進に組織的に取り組む。また、若年層への啓発には、若年層向けの雑誌、放送媒体、インターネット等を含む様々な広報手段を用いて気軽に目に触れる機会を増やすとともに、献血の行動へと繋げるため、学生献血推進ボランティア等の同世代からの働きかけや、献血についての広告に国が作成した献血推進キャラクターを活用する等、実効性のある取組が必要である。特に１０代層への啓発には、採血基準の改正により、男性に限り４００ミリリットル全血採血が１７歳から可能となったこと等について情報を伝え、献血者の協力を得る。さらに、子が幼少期にある親子に対し、血液の大切さや助け合いの心について、親子向けの雑誌等の広報手段や血液センター等を活用して啓発を行うとともに、親から子へ献血や血液製剤の意義を伝えることが重要であることから、地域の特性に応じて採血所に託児体制を確保する等、親子が献血に触れ合う機会を設ける。 ・　国は、高校生を対象とした献血や血液製剤について解説した教材や中学生を対象とした血液への理解を促すポスターを作成し、都道府県、市町村及び採血事業者と協力して、これらの教材等を活用しながら、献血や血液製剤に関する理解を深めるための普及啓発を行う。 ・　都道府県及び市町村は、地域の実情に応じて、若年層の献血への関心を高めるため、学校等において、ボラン	＜若年層を対象とした対策＞ ・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得るとともに、機能的な連携を図ることにより、若年層の献血や血液製剤に関する理解の促進及び献血体験の促進に組織的に取り組む。また、若年層への啓発には、若年層向けの雑誌、放送媒体、インターネット等を含む様々な広報手段を用いて、同世代からの働きかけや、献血についての広告に国が作成した献血推進キャラクターを活用する等、効果的な取組が必要である。特に１０代層への啓発には、採血基準の改正により、男性に限り４００ミリリットル全血採血が１７歳から可能となること等について情報を伝え、献血者の協力を得る。さらに、子が幼少期にある親子に対し、血液の大切さや助け合いの心について、親子向けの雑誌等の広報手段や血液センター等を活用して啓発を行うとともに、親から子へ献血や血液製剤の意義を伝えることが重要であることから、地域の特性に応じて採血所に託児体制を確保する等、親子が献血に触れ合う機会を設ける。 ・　国は、高校生を対象とした献血や血液製剤について解説した教材や中学生を対象とした血液への理解を促すポスターを作成し、都道府県、市町村及び採血事業者と協力して、これらの教材等を活用しながら、献血や血液製剤に関する理解を深めるための普及啓発を行う。 ・　都道府県及び市町村は、地域の実情に応じて、若年層の献血への関心を高めるため、学校等において、ボラン

ティア活動推進の観点を踏まえつつ献血や血液製剤についての情報提供を行うとともに、献血推進活動を行うボランティア組織との有機的な連携を確保する。 ・　採血事業者は、その人材や施設を活用し、若年層へ献血の意義や血液製剤について分かりやすく説明する「献血セミナー」や血液センター等での体験学習を積極的に行い、正しい知識の普及啓発と協力の確保を図る。その推進に当たっては、国と連携するとともに、都道府県、市町村及び献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得る。 ・　採血事業者は、国及び都道府県の協力を得て、学生献血推進ボランティアとの更なる連携を図り、大学等における献血の推進を促すとともに、将来、医療従事者になろうとする者に対して、多くの国民の献血によって医療が支えられている事実や血液製剤の適正使用の重要性への理解を深めてもらうための取組を行う。 ＜５０～６０歳代を対象とした対策＞ ・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、年齢別人口に占める献血者の率が低い傾向にある５０～６０歳代の層に対し、血液製剤の利用実態や献血可能年齢等について正確な情報を伝え、相互扶助の観点からの啓発を行い、献血者の増加を図る。また、血小板成分採血について、採血基準の改正により、男性に限り６９歳まで（６５歳から６９歳までの者については、６０歳から６４歳までの間に献血の経験がある者に限る。）可能となったことについて情報を伝え、献血者の確保を図る。	ティア活動推進の観点を踏まえつつ献血や血液製剤についての情報提供を行うとともに、献血推進活動を行うボランティア組織との有機的な連携を確保する。 ・　採血事業者は、その人材や施設を活用し、若年層へ献血の意義や血液製剤について分かりやすく説明する「献血セミナー」や血液センター等での体験学習を積極的に行い、正しい知識の普及啓発と協力の確保を図る。その推進に当たっては、国と連携するとともに、都道府県、市町村及び献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得る。 ・　採血事業者は、国及び都道府県の協力を得て、学生献血ボランティアとの更なる連携を図り、大学等における献血の推進を促すとともに、将来、医療従事者になろうとする者に対して、多くの国民の献血によって医療が支えられている事実や血液製剤の適正使用の重要性への理解を深めてもらうための取組を行う。 ＜５０～６０歳代を対象とした対策＞ ・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、年齢別人口に占める献血者の率が低い傾向にある５０～６０歳代の層に対し、血液製剤の利用実態や献血可能年齢等について正確な情報を伝え、相互扶助の観点からの啓発を行い、献血者の増加を図る。また、血小板成分採血について、採血基準の改正により、男性に限り６９歳まで（６５歳から６９歳までの者については、６０歳から６４歳までの間に献血の経験がある者に限る。）可能となることについて情報を伝え、献血者の確保を図る。

＜企業等における献血の推進対策＞ ・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、献血に協賛する企業や団体を募り、その社会貢献活動の一つとして、企業等における献血の推進を促す。また、血液センター等における献血推進活動の展開に際し、地域の実情に即した方法で企業等との連携強化を図り、企業等における献血の推進を図るための呼びかけを行う。 ＜複数回献血者対策＞ ・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、複数回献血者の協力が十分に得られるよう、平素から血液センターに登録された献血者に対し、機動的かつ効率的に呼びかけを行う体制を構築する。また、献血に継続的に協力が得られている複数回献血者の組織化及びサービスの向上を図り、その増加に取り組むとともに、献血の普及啓発活動に協力が得られるよう取り組む。 ＜献血推進キャンペーン等の実施＞ ・　国は、献血量を確保しやすくするとともに、感染症等のリスクを低減させる等の利点がある４００ミリリットル全血採血及び成分採血の推進及び普及のため、都道府県及び採血事業者とともに、７月に「愛の血液助け合い運動」を、１月及び２月に「はたちの献血」キャンペーンを実施するほか、血液の供給状況に応じて献血推進キャンペーン活動を緊急的に実施する。また、様々な広報手段を用いて献血や血液製剤に関する理解と献血へ	＜企業等における献血の推進対策＞ ・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、献血に協賛する企業や団体を募り、その社会貢献活動の一つとして、企業等における献血の推進を促す。また、血液センター等における献血推進活動の展開に際し、地域の実情に即した方法で企業等との連携強化を図り、企業等における献血の推進を図るための呼びかけを行う。 ＜複数回献血者対策＞ ・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、複数回献血者の協力が十分に得られるよう、平素から血液センターに登録された献血者に対し、機動的かつ効率的に呼びかけを行う体制を構築する。また、献血に継続的に協力が得られている複数回献血者の組織化及びサービスの向上を図り、その増加に取り組むとともに、献血の普及啓発活動に協力が得られるよう取り組む。 ＜献血推進キャンペーン等の実施＞ ・　国は、献血量を確保しやすくするとともに、感染症等のリスクを低減させる等の利点がある４００ミリリットル全血採血及び成分採血の推進及び普及のため、都道府県及び採血事業者とともに、７月に「愛の血液助け合い運動」を、１月及び２月に「はたちの献血」キャンペーンを実施するほか、血液の供給状況に応じて献血推進キャンペーン活動を緊急的に実施する。また、様々な広報手段を用いて献血や血液製剤に関する理解と献血へ

の協力を呼びかけるとともに、献血場所を確保するため、関係者に必要な協力を求める。 ・　都道府県、市町村及び採血事業者においても、これらの献血推進活動を実施することが重要である。また、市町村においては、地域における催物の機会等を活用する等、積極的に取り組むことが望ましい。 **②　献血運動推進全国大会の開催等** ・　国は、都道府県及び採血事業者とともに、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の国内自給を推進し、広く国民に献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を求めるため、7月に献血運動推進全国大会を開催するとともに、その広報に努める。また、国及び都道府県は、献血運動の推進に関し積極的に協力し、模範となる実績を示した団体又は個人に対し表彰を行う。 **③　献血推進運動中央連絡協議会の開催** ・　国は、都道府県、市町村、採血事業者、献血推進活動を行うボランティア組織、患者団体等の代表者の参加を得て、効果的な献血推進のための方策や献血を推進する上での課題等について協議を行うため、献血推進運動中央連絡協議会を開催する。 **④　献血推進協議会の活用** ・　都道府県は、献血や血液製剤に関する住民の理解と献血への協力を求め、血液事業の適正な運営を確保するため、採血事業者、医療関係者、商工会議所、教育機関、報道機関等から幅広く参加者を募って、献血推進協議会を設置し、定期的に開催することが求められ	の協力を呼びかけるとともに、献血場所を確保するため、関係者に必要な協力を求める。 ・　都道府県、市町村及び採血事業者においても、これらの献血推進活動を実施することが重要である。また、市町村においては、地域における催物の機会等を活用する等、積極的に取り組むことが望ましい。 **②　献血運動推進全国大会の開催等** ・　国は、都道府県及び採血事業者とともに、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の国内自給を推進し、広く国民に献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を求めるため、7月に献血運動推進全国大会を開催するとともに、その広報に努める。また、国及び都道府県は、献血運動の推進に関し積極的に協力し、模範となる実績を示した団体又は個人に対し表彰を行う。 **③　献血推進運動中央連絡協議会の開催** ・　国は、都道府県、市町村、採血事業者、献血推進活動を行うボランティア組織、患者団体等の代表者の参加を得て、効果的な献血推進のための方策や献血を推進する上での課題等について協議を行うため、献血推進運動中央連絡協議会を開催する。 **④　献血推進協議会の活用** ・　都道府県は、献血や血液製剤に関する住民の理解と献血への協力を求め、血液事業の適正な運営を確保するため、採血事業者、医療関係者、商工会議所、教育機関、報道機関等から幅広く参加者を募って、献血推進協議会を設置し、定期的に開催することが求められ

る。市町村においても、同様の協議会を設置することが望ましい。 ・　都道府県及び市町村は、献血推進協議会を活用し、採血事業者及び血液事業に関わる民間組織等と連携して、都道府県献血推進計画の策定のほか、献血や血液製剤に関する教育及び啓発を検討するとともに、民間の献血推進組織の育成等を行うことが望ましい。 **⑤　その他関係者による取組** ・　官公庁、企業、医療関係団体等は、その構成員に対し、ボランティア活動である献血に対し積極的に協力を呼びかけるとともに、献血のための休暇取得を容易にするよう配慮するなど、進んで献血しやすい環境作りを推進することが望ましい。 **2　献血者が安心して献血できる環境の整備** ・　採血事業者は、献血の受入れに当たっては献血者に不快の念を与えないよう、丁寧な処遇をすることに特に留意し、献血者の要望を把握するとともに、採血後の休憩スペースを十分に確保する等、献血受入体制の改善に努める。また、献血者の個人情報を保護するとともに、国の適切な関与の下で献血による健康被害に対する補償のための措置を実施する等、献血者が安心して献血できる環境整備を行う。 ・　採血事業者は、特に初回献血者が抱いている不安等を払拭するため、採血の手順や採血後の過ごし方等について、映像やリーフレット等を活用した事前説明を十分に行い、献血者の安全確保を図る。 ・　採血事業者は、採血所における地域の特性に合わせたイ	る。市町村においても、同様の協議会を設置することが望ましい。 ・　都道府県及び市町村は、献血推進協議会を活用し、採血事業者及び血液事業に関わる民間組織等と連携して、都道府県献血推進計画の策定のほか、献血や血液製剤に関する教育及び啓発を検討するとともに、民間の献血推進組織の育成等を行うことが望ましい。 **⑤　その他関係者による取組** ・　官公庁、企業、医療関係団体等は、その構成員に対し、ボランティア活動である献血に対し積極的に協力を呼びかけるとともに、献血のための休暇取得を容易にするよう配慮するなど、進んで献血しやすい環境作りを推進することが望ましい。 **2　献血者が安心して献血できる環境の整備** ・　採血事業者は、献血の受入れに当たっては献血者に不快の念を与えないよう、丁寧な処遇をすることに特に留意し、献血者の要望を把握するとともに、採血後の休憩スペースを十分に確保する等、献血受入体制の改善に努める。また、献血者の個人情報を保護するとともに、国の適切な関与の下で献血による健康被害に対する補償のための措置を実施する等、献血者が安心して献血できる環境整備を行う。 ・　採血事業者は、特に初回献血者が抱いている不安等を払拭するため、採血の手順や採血後の過ごし方等について、映像やリーフレット等を活用した事前説明を十分に行い、献血者の安全確保を図る。 ・　採血事業者は、採血所における地域の特性に合わせたイ

メージ作りや移動採血車の外観の見直し等、なお一層のイメージアップを図り、献血者の増加を図る。
・国及び都道府県は、採血事業者によるこれらの取組を支援することが重要である。

第３節　その他献血の推進に関する重要事項

１　献血の推進に際し、考慮すべき事項

①・　血液検査による健康管理サービスの充実

・　採血事業者は、献血制度の健全な発展を図るため、採血に際して献血者の健康管理に資する検査を行い、献血者の希望を確認して、その結果を通知する。また、低色素により献血ができなかった献血申込者に対して栄養士による健康相談を実施し、献血者の増加を図る。
・　国は、採血事業者によるこれらの取組を支援する。また、献血者の健康管理に資する検査の充実は献血の推進に有効であることから、本人の同意の上、検査結果を健康診査、人間ドック、職域検査等で活用するとともに、地域における保健指導にも用いることができるよう、周知又は必要な指導を行う。
・　都道府県及び市町村は、これらの取組に協力する。

②　献血者の利便性の向上

・　採血事業者は、安全性に配慮しつつ、効率的に採血を行うため、立地条件等を考慮した採血所の設置、地域の実情に応じた移動採血車による計画的採血等、献血者の利便性及び安全で安心な献血に配慮した献血受入体制の整備及び充実を図る。
・　都道府県及び市町村は、採血事業者と十分協議して移

メージ作りや移動採血車の外観の見直し等、なお一層のイメージアップを図り、献血者の増加を図る。
・国及び都道府県は、採血事業者によるこれらの取組を支援することが重要である。

第３節　その他献血の推進に関する重要事項

１　献血の推進に際し、考慮すべき事項

①・　血液検査による健康管理サービスの充実

・　採血事業者は、献血制度の健全な発展を図るため、採血に際して献血者の健康管理に資する検査を行い、献血者の希望を確認して、その結果を通知する。また、低色素により献血ができなかった献血申込者に対して栄養士による健康相談を実施し、献血者の増加を図る。
・　国は、採血事業者によるこれらの取組を支援する。また、献血者の健康管理に資する検査の充実は献血の推進に有効であることから、本人の同意の上、検査結果を健康診査、人間ドック、職域検査等で活用するとともに、地域における保健指導にも用いることができるよう、周知又は必要な指導を行う。
・　都道府県及び市町村は、これらの取組に協力する。

②　献血者の利便性の向上

・　採血事業者は、安全性に配慮しつつ、効率的に採血を行うため、立地条件等を考慮した採血所の設置、地域の実情に応じた移動採血車による計画的採血等、献血者の利便性及び安全で安心な献血に配慮した献血受入体制の整備及び充実を図る。
・　都道府県及び市町村は、採血事業者と十分協議して移

動採血車による採血等の日程を設定し、そのための公共施設の提供等、採血事業者の献血の受入れに協力することが重要である。また、採血事業者とともに献血実施の日時や場所等について、国民に対して献血への協力が得られるよう、十分な広報を行う必要がある。

③　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進

・　国は、「輸血医療の安全性確保のための総合対策」に基づき、採血事業者と連携し、献血者に対する健康管理サービスの充実等による健康な献血者の確保、献血者の本人確認の徹底等の検査目的の献血の防止のための措置を講ずる等、善意の献血者の協力を得て、血液製剤の安全性を向上するための対策を推進する。

④　採血基準の在り方の検討

・　国は、献血者の健康保護を第一に考慮しつつ、献血の推進及び血液の有効利用の観点から、採血基準の見直しの検討を行う。

⑤　まれな血液型の血液の確保

・　採血事業者は、まれな血液型を持つ患者に対する血液製剤の供給を確保するため、まれな血液型を持つ者に対し、その意向を踏まえ、登録を依頼する。
・　国は、まれな血液型の血液の供給状況について調査する。

⑥　２００ミリリットル全血採血の在り方について

・　国、都道府県、市町村および採血事業者は、医療機関からの需要、血液製剤の安全性、製造効率の観点から、献血を推進する上では、４００ミリリットル全血採血を基本として行うものとする。
・　しかしながら、今後の献血推進という観点からは、若

動採血車による採血等の日程を設定し、そのための公共施設の提供等、採血事業者の献血の受入れに協力することが重要である。

③　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進

・　国は、「輸血医療の安全性確保のための総合対策」に基づき、採血事業者と連携し、献血者に対する健康管理サービスの充実等による健康な献血者の確保、献血者の本人確認の徹底等の検査目的の献血の防止のための措置を講ずる等、善意の献血者の協力を得て、血液製剤の安全性を向上するための対策を推進する。

④　採血基準の在り方の検討

・　国は、献血者の健康保護を第一に考慮しつつ、献血の推進及び血液の有効利用の観点から、採血基準の見直しの検討を行う。

⑤　まれな血液型の血液の確保

・　採血事業者は、まれな血液型を持つ患者に対する血液製剤の供給を確保するため、まれな血液型を持つ者に対し、その意向を踏まえ、登録を依頼する。
・　国は、まれな血液型の血液の供給状況について調査する。

⑥　２００ミリリットル全血採血の在り方の検討

・　国は、２００ミリリットル全血採血の在り方について、医療機関における使用実態等を踏まえ、検討を行う。

年層の献血推進が非常に重要であることから、４００ミリリットル全血採血ができない若年層に対しては、学校と連携して「献血セミナー」を実施する等、献血の知識について啓発する取組を積極的に行う。また、２００ミリリットル全血採血については、将来の献血基盤となる若年層の初回献血を中心に推進するものとする。 **2　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応** ・　国、都道府県及び採血事業者は、赤血球製剤等の在庫水準を常時把握し、在庫が不足する場合又は不足が予測される場合には、その供給に支障を及ぼす危険性を勘案し、国及び採血事業者が策定した対応マニュアルに基づき、早急に所要の対策を講ずることが重要である。 **3　災害時等における献血の確保等** ・　国、都道府県及び市町村は、災害時等において献血が確保されるよう、採血事業者と連携して必要とされる献血量を把握した上で、様々な広報手段を用いて、需要に見合った広域的な献血の確保を行うとともに、製造販売業者等の関係者と連携し、献血により得られた血液が円滑に現場に供給されるよう措置を講ずることが必要である。また、採血事業者は、災害時における献血受入体制を構築し、広域的な需給調整等の手順を定め、国、都道府県及び市町村と連携して対応できるよう備えることにより、災害時における献血の受入れに協力する。 ・　今般の東日本大震災により、東北地方の一部の地域（宮城県、福島県、岩手県）で献血受入ができない環境となったが、全国の被災していない地域において被災地域の	**2　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応** ・　国、都道府県及び採血事業者は、赤血球製剤等の在庫水準を常時把握し、在庫が不足する場合又は不足が予測される場合には、その供給に支障を及ぼす危険性を勘案し、国及び採血事業者が策定した対応マニュアルに基づき、早急に所要の対策を講ずることが重要である。 **3　災害時等における献血の確保等** ・　国、都道府県及び市町村は、災害時等において献血が確保されるよう、採血事業者と連携して必要とされる献血量を把握した上で、様々な広報手段を用いて、需要に見合った広域的な献血の確保を行うとともに、製造販売業者等の関係者と連携し、献血により得られた血液が円滑に現場に供給されるよう措置を講ずることが必要である。また、採血事業者は、災害時における献血受入体制を構築し、広域的な需給調整等の手順を定め、国、都道府県及び市町村と連携して対応できるよう備えることにより、災害時における献血の受入れに協力する。

需要分を加えた献血血液を確保し、医療機関のニーズに合わせて血液製剤を安定的に供給した。今後も、献血確保に支障をきたさないよう、全国的に継続的な献血推進を図っていくことが重要である。 ・　さらに、東日本大震災の際には、停電や一般電話回線（携帯回線を含む）の輻輳により通信手段の確保に困難が生じ、また、震災による精油所の被災や燃料の流通にも支障が生じたことにより、移動採血車等の燃料の確保が困難であったことから、国、都道府県、市町村及び採血事業者は、災害時等に備えた複数の通信手段の確保や燃料の確保が的確に行われるよう対策を講ずる必要がある。 **4　献血推進施策の進捗（ちょく）状況等に関する確認と評価** ・　国、都道府県及び市町村は、献血推進のための施策の短期的又は長期的な効果及び進捗（ちょく）状況並びに採血事業者による献血の受入れの実績を確認し、その評価を次年度の献血推進計画等の作成に当たり参考とする。また、必要に応じ、献血推進のための施策を見直すことが必要である。 ・　国は、献血推進運動中央連絡協議会等の機会を活用し、献血の推進及び受入れに関し関係者の協力を求める必要性について献血推進活動を行うボランティア組織と認識を共有し、必要な措置を講ずる。 ・　採血事業者は、献血の受入れに関する実績、体制等の評価を行い、献血の推進に活用する。	**4　献血推進施策の進捗（ちょく）状況等に関する確認と評価** ・　国、都道府県及び市町村は、献血推進のための施策の短期的又は長期的な効果及び進捗（ちょく）状況並びに採血事業者による献血の受入れの実績を確認し、その評価を次年度の献血推進計画等の作成に当たり参考とする。また、必要に応じ、献血推進のための施策を見直すことが必要である。 ・　国は、献血推進運動中央連絡協議会等の機会を活用し、献血の推進及び受入れに関し関係者の協力を求める必要性について献血推進活動を行うボランティア組織と認識を共有し、必要な措置を講ずる。 ・　採血事業者は、献血の受入れに関する実績、体制等の評価を行い、献血の推進に活用する。

資料7

けんけつちゃん販売の権利関係について

知的財産権（商標権・著作権）は電通が保有している

		国が販売	第三者が販売
知的財産	権利保有について	権利を国に譲渡する場合、約2～3千万円と主張（電通）	電通が権利保有したままでも販売は可能 ※但し、キャラクターのクオリティ管理のため、デザイン制作の受注が条件（電通）
	実施料について	不要	キャラクター実施料・ロイヤリティについて発生する可能性がある ※但し、国が指定した第三者の場合においては、実施料・ロイヤリティは発生しない
財政法関係		財政法第13条に基づく特別会計（国の特定の収入と支出を経理する）を設置する必要があるが限定的。 （真に国として行う必要がある事業のみ）	―
販売可能性		×	○

けんけつちゃん販売のメリット・デメリット

	販売した場合	販売しない場合
献血推進上のメリット	・キャラクターを目にする機会が増え、認知度があがる可能性がある。 ・輸血歴などにより、実際に献血協力できない方が購入することで、献血協力への一つの行動となる。 ・売り上げがでれば、献血推進の活動費に充てることも考えられる。	・キャラクター誕生以降、地道に認知度をあげている（広報業界では成功例と言われている）ため、販売による問題などのリスクを心配することなく、これまでどおりの広報が可能。
献血推進上のデメリット	・無償の献血と金銭を伴う販売を行った場合に国民の理解を得られるかどうか。 ・販売に問題が起きた場合（裏で利益をあげていたなど）、多くの国民からの無償の愛を裏切ることになり、これまでの献血協力者が離れる。	・露出が限定的（献血推進キャンペーン会場、ルームなど）となる。
資金やその管理等	・収支管理等を適正に行う必要がある。 ・収支報告などのあらゆる情報を国民に向け、しっかりと公開する必要がある。	―

参考資料

平成２３年度の献血の推進に関する計画

平成２３年３月２３日

厚生労働省告示第６４号

目次

前文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１節　平成２３年度に献血により確保すべき血液の目標量・・・・・・・・・ 1

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項・・・・・・ 1
　１　献血に関する普及啓発活動の実施・・・・・・・・・・・・・・ 1
　　（１）　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進
　　（２）　献血運動推進全国大会の開催等
　　（３）　献血推進運動中央連絡協議会の開催
　　（４）　献血推進協議会の活用
　　（５）　その他関係者による取組
　２　献血者が安心して献血できる環境の整備・・・・・・・・・・・ 5

第３節　その他献血の推進に関する重要事項・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　１　献血の推進に際し、考慮すべき事項・・・・・・・・・・・・・ 5
　　（１）　血液検査による健康管理サービスの充実
　　（２）　献血者の利便性の向上
　　（３）　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進
　　（４）　採血基準の在り方の検討
　　（５）　まれな血液型の血液の確保
　２　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応・・・・ 6
　３　災害時等における献血の確保等・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　４　献血推進施策の進捗状況等に関する確認と評価・・・・・・ 6

平成２３年度の献血の推進に関する計画

前文

・　本計画は、安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律（昭和３１年法律第１６０号）第１０条第１項の規定に基づき定める平成２３年度の献血の推進に関する計画であり、血液製剤の安全性の向上及び安定供給の確保を図るための基本的な方針（平成２０年厚生労働省告示第３２６号）に基づくものである。

第１節　平成２３年度に献血により確保すべき血液の目標量

・　平成２３年度に必要と見込まれる輸血用血液製剤の量は、全血製剤０．０２万リットル、赤血球製剤５４万リットル、血漿（しょう）製剤２７万リットル、血小板製剤１７万リットルであり、それぞれ０．０２万リットル、５４万リットル、２７万リットル、１７万リットルが製造される見込みである。

・　さらに、確保されるべき原料血漿（しょう）の量の目標を勘案すると、平成２３年度には、全血採血による１４５万リットル及び成分採血による６２万リットル（血漿（しょう）採血２７万リットル及び血小板採血３５万リットル）の計２０７万リットルの血液を献血により確保する必要がある。

第２節　前節の目標量を確保するために必要な措置に関する事項

前年度までの献血の実施状況とその評価を踏まえ、平成２３年度の献血推進計画における具体的な措置を以下のように定める。

１　献血に関する普及啓発活動の実施

・　国は、都道府県、市町村（特別区を含む。以下同じ。）、採血事業者等の関係者の協力を得て、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の安定供給を確保し、その国内自給を推進するとともに、広く国民に対し、治療に必要な血液製剤の確保が相互扶助と博愛精神による自発的な献血によって支えられていることや、血液製剤の適正使用が求められていること等を含め、献血や血液製剤について国民に正確な情報を伝え、その理解と献血への協力を求めるため、教育及び啓発を行う。

・　都道府県及び市町村は、国、採血事業者等の関係者の協力を得て、より多くの住民の献血への参加を促進するため、対象となる年齢層や地域の実情に応じた啓発、献血推進組織の育成等を行うことにより、献血への関心を高めることが必要である。

・　採血事業者は、国、都道府県、市町村等の関係者の協力を得て、献血者の安全性に配慮するとともに、継続して献血に協力できる環境の整備を行うことが重要である。

このため、国、都道府県、市町村等の関係者と協力して効果的なキャンペーンを実施すること等により、献血や血液製剤に関する一層の理解と献血への協力を呼びかけることが求められる。

・　国、都道府県、市町村、採血事業者及び医療関係者は、国民に対し、病気や怪我のために輸血を受けた患者や、その家族の声を伝えること等により、血液製剤がこれを必要とする患者への医療に欠くことのできない有限で貴重なものであることを含め、献血や血液製剤についての普及啓発を実施し、又はこれに協力することが必要である。また、少子高齢化の進行による血液製剤を必要とする患者の増加や献血可能人口の減少、血液製剤の利用実態等について正確な情報を伝え、献血者等の意見を踏まえつつ、これらの情報提供や普及啓発の手法等の改善に努めることが必要である。さらに、血液製剤の安全性の確保のための取組の一環として、感染症の検査を目的とした献血を行わないよう、献血における本人確認や問診の徹底はもとより、平素から様々な広報手段を用いて、国民に周知徹底する必要がある。

・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、平成２２年１月２７日に実施された英国滞在歴による献血制限の見直し及び平成２３年４月１日に施行される採血基準の改正について、国民に対して十分に広報を行い、献血への協力を求める必要がある。

・　これらを踏まえ、以下に掲げる献血推進のための施策を実施する。

①　効果的な普及啓発、献血者募集等の推進

血液製剤について、国内自給が確保されることを基本としつつ、将来にわたって安定的に供給される体制を維持するため、幼少期も含めた若年層、企業・団体、複数回献血者に対して、普及啓発の対象を明確にした効果的な活動や重点的な献血者募集を実施し、以下の取組を行う。

＜若年層を対象とした対策＞

・　国、都道府県、市町村及び採血事業者は、献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得るとともに、機能的な連携を図ることにより、若年層の献血や血液製剤に関する理解の促進及び献血体験の促進に組織的に取り組む。また、若年層への啓発には、若年層向けの雑誌、放送媒体、インターネット等を含む様々な広報手段を用いて、同世代からの働きかけや、献血についての広告に国が作成した献血推進キャラクターを活用する等、効果的な取組が必要である。特に１０代層への啓発には、採血基準の改正により、男性に限り４００ミリリットル全血採血が１７歳から可能となること等について情報を伝え、献血者の協力を得る。さらに、子が幼少期にある親子に対し、血液の大切さや助け合いの心について、親子向けの雑誌等の広報手段や血液センター等を活用して啓発を行うとともに、親から子へ献血や血液製剤の意義を伝えることが重要であることから、地域の特性に応じて採血所に託児体制を確保する等、親子が献血に触れ合う機会を設ける。

・　国は、高校生を対象とした献血や血液製剤について解説した教材や中学生を対象とした血液への理解を促すポスターを作成し、都道府県、市町村及び採血事業者と協力して、これらの教材等を活用しながら、献血や血液製剤に関する理解を

深めるための普及啓発を行う。

・　都道府県及び市町村は、地域の実情に応じて、若年層の献血への関心を高めるため、学校等において、ボランティア活動推進の観点を踏まえつつ献血や血液製剤についての情報提供を行うとともに、献血推進活動を行うボランティア組織との有機的な連携を確保する。

・　採血事業者は、その人材や施設を活用し、若年層へ献血の意義や血液製剤について分かりやすく説明する「献血セミナー」や血液センター等での体験学習を積極的に行い、正しい知識の普及啓発と協力の確保を図る。その推進に当たっては、国と連携するとともに、都道府県、市町村及び献血推進活動を行うボランティア組織等の協力を得る。

・　採血事業者は、国及び都道府県の協力を得て、学生献血ボランティアとの更なる連携を図り、大学等における献血の推進を促すとともに、将来、医療従事者になろうとする者に対して、多くの国民の献血によって医療が支えられている事実や血液製剤の適正使用の重要性への理解を深めてもらうための取組を行う。

＜５０～６０歳代を対象とした対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、年齢別人口に占める献血者の率が低い傾向にある５０～６０歳代の層に対し、血液製剤の利用実態や献血可能年齢等について正確な情報を伝え、相互扶助の観点からの啓発を行い、献血者の増加を図る。また、血小板成分採血について、採血基準の改正により、男性に限り６９歳まで（６５歳から６９歳までの者については、６０歳から６４歳までの間に献血の経験がある者に限る。）可能となることについて情報を伝え、献血者の確保を図る。

＜企業等における献血の推進対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、献血に協賛する企業や団体を募り、その社会貢献活動の一つとして、企業等における献血の推進を促す。また、血液センター等における献血推進活動の展開に際し、地域の実情に即した方法で企業等との連携強化を図り、企業等における献血の推進を図るための呼びかけを行う。

＜複数回献血者対策＞

・　国及び採血事業者は、都道府県及び市町村の協力を得て、複数回献血者の協力が十分に得られるよう、平素から血液センターに登録された献血者に対し、機動的かつ効率的に呼びかけを行う体制を構築する。また、献血に継続的に協力が得られている複数回献血者の組織化及びサービスの向上を図り、その増加に取り組むとともに、献血の普及啓発活動に協力が得られるよう取り組む。

＜献血推進キャンペーン等の実施＞

・　国は、献血量を確保しやすくするとともに、感染症等のリスクを低減させる等の利点がある４００ミリリットル全血採血並びに成分採血の推進及び普及のため、都道府県及び採血事業者とともに、７月に「愛の血液助け合い運動」を、１月及び２月に「はたちの献血」キャンペーンを実施するほか、血液の供給状況に応じて献血推進キャンペーン活動を緊急的に実施する。また、様々な広報手段を用いて献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を呼びかけるとともに、献血場所を確保するため、関係者に必要な協力を求める。

・　都道府県、市町村及び採血事業者においても、これらの献血推進活動を実施することが重要である。また、市町村においては、地域における催物の機会等を活用する等、積極的に取り組むことが望ましい。

②　献血運動推進全国大会の開催等

・　国は、都道府県及び採血事業者とともに、献血により得られた血液を原料とした血液製剤の国内自給を推進し、広く国民に献血や血液製剤に関する理解と献血への協力を求めるため、７月に献血運動推進全国大会を開催するとともに、その広報に努める。また、国及び都道府県は、献血運動の推進に関し積極的に協力し、模範となる実績を示した団体又は個人に対し表彰を行う。

③　献血推進運動中央連絡協議会の開催

・　国は、都道府県、市町村、採血事業者、献血推進活動を行うボランティア組織、患者団体等の代表者の参加を得て、効果的な献血推進のための方策や献血を推進する上での課題等について協議を行うため、献血推進運動中央連絡協議会を開催する。

④　献血推進協議会の活用

・　都道府県は、献血や血液製剤に関する住民の理解と献血への協力を求め、血液事業の適正な運営を確保するため、採血事業者、医療関係者、商工会議所、教育機関、報道機関等から幅広く参加者を募って、献血推進協議会を設置し、定期的に開催することが求められる。市町村においても、同様の協議会を設置することが望ましい。

・　都道府県及び市町村は、献血推進協議会を活用し、採血事業者及び血液事業に関わる民間組織等と連携して、都道府県献血推進計画の策定のほか、献血や血液製剤に関する教育及び啓発を検討するとともに、民間の献血推進組織の育成等を行うことが望ましい。

⑤　その他関係者による取組

・　官公庁、企業、医療関係団体等は、その構成員に対し、ボランティア活動である献血に対し積極的に協力を呼びかけるとともに、献血のための休暇取得を容易にするよう配慮する等、進んで献血しやすい環境作りを推進することが望ましい。

2　献血者が安心して献血できる環境の整備

・　採血事業者は、献血の受入れに当たっては献血者に不快の念を与えないよう、丁寧な処遇をすることに特に留意し、献血者の要望を把握するとともに、採血後の休憩スペースを十分に確保する等、献血受入体制の改善に努める。また、献血者の個人情報を保護するとともに、国の適切な関与の下で献血による健康被害に対する補償のための措置を実施する等、献血者が安心して献血できる環境整備を行う。

・　採血事業者は、特に初回献血者が抱いている不安等を払拭するため、採血の手順や採血後の過ごし方等について、映像やリーフレット等を活用した事前説明を十分に行い、献血者の安全確保を図る。

・　採血事業者は、採血所における地域の特性に合わせたイメージ作りや移動採血車の外観の見直し等、なお一層のイメージアップを図り、献血者の増加を図る。

・　国及び都道府県は、採血事業者によるこれらの取組を支援することが重要である。

第３節　その他献血の推進に関する重要事項

1　献血の推進に際し、考慮すべき事項

①　血液検査による健康管理サービスの充実

・　採血事業者は、献血制度の健全な発展を図るため、採血に際して献血者の健康管理に資する検査を行い、献血者の希望を確認してその結果を通知する。また、低色素により献血ができなかった献血申込者に対して、栄養士による健康相談を実施し、献血者の増加を図る。

・　国は、採血事業者によるこれらの取組を支援する。また、献血者の健康管理に資する検査の充実は献血の推進に有効であることから、本人の同意の上、検査結果を健康診査、人間ドック、職域検査等で活用するとともに、地域における保健指導にも用いることができるよう、周知又は必要な指導を行う。

・　都道府県及び市町村は、これらの取組に協力する。

②　献血者の利便性の向上

・　採血事業者は、安全性に配慮しつつ、効率的に採血を行うため、立地条件等を考慮した採血所の設置、地域の実情に応じた移動採血車による計画的採血等、献血者の利便性及び安全で安心な献血に配慮した献血受入体制の整備及び充実を図る。

・　都道府県及び市町村は、採血事業者と十分協議して移動採血車による採血等の日程を設定し、そのための公共施設の提供等、採血事業者の献血の受入れに協力することが重要である。

③　血液製剤の安全性を向上するための対策の推進

・　国は、「輸血医療の安全性確保のための総合対策」に基づき、採血事業者と連携し、献血者に対する健康管理サービスの充実等による健康な献血者の確保、献血者の本人確認の徹底等の検査目的の献血の防止のための措置を講ずる等、善意の献血者の協力を得て、血液製剤の安全性を向上するための対策を推進する。

④　採血基準の在り方の検討

・　国は、献血者の健康保護を第一に考慮しつつ、献血の推進及び血液の有効利用の観点から、採血基準の見直しの検討を行う。

⑤　まれな血液型の血液の確保

・　採血事業者は、まれな血液型を持つ患者に対する血液製剤の供給を確保するため、まれな血液型を持つ者に対し、その意向を踏まえ、登録を依頼する。

・　国は、まれな血液型の血液の供給状況について調査する。

⑥　２００ミリリットル全血採血の在り方の検討

・　国は、２００ミリリットル全血採血の在り方について、医療機関における使用実態等を踏まえ、検討を行う。

2　血液製剤の在庫水準の常時把握と不足時の的確な対応

・　国、都道府県及び採血事業者は、赤血球製剤等の在庫水準を常時把握し、在庫が不足する場合又は不足が予測される場合には、その供給に支障を及ぼす危険性を勘案し、国及び採血事業者が策定した対応マニュアルに基づき、早急に所要の対策を講ずることが重要である。

3　災害時等における献血の確保等

・　国、都道府県及び市町村は、災害時等において献血が確保されるよう、採血事業者と連携して必要とされる献血量を把握した上で、様々な広報手段を用いて、需要に見合った広域的な献血の確保を行うとともに、製造販売業者等の関係者と連携し、献血により得られた血液が円滑に現場に供給されるよう措置を講ずることが必要である。また、採血事業者は、災害時における献血受入体制を構築し、広域的な需給調整等の手順を定め、国、都道府県及び市町村と連携して対応できるよう備えることにより、災害時における献血の受入れに協力する。

4　献血推進施策の進捗状況等に関する確認と評価

・　国、都道府県及び市町村は、献血推進のための施策の短期的又は長期的な効果及び進捗状況並びに採血事業者による献血の受入れの実績を確認し、その評価を次年度の献血推進計画等の作成に当たり参考とする。また、必要に応じ、献血推進のための施策を見直すことが必要である。

・　国は、献血推進運動中央連絡協議会等の機会を活用し、献血の推進及び受入れに関し関係者の協力を求める必要性について献血推進活動を行うボランティア組織と認識を共有し、必要な措置を講ずる。

・　採血事業者は、献血の受入れに関する実績、体制等の評価を行い、献血の推進に活用する。